

# 南口 A 遺跡

## 発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第191集



みなみ ぐち

# 南口 A 遺跡

## 発掘調査報告書

---

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 191 集

平成 22 年

財団法人 山形県埋蔵文化財センター





遺跡全景（北から）



調査区全景（上空から）



調査区北側完振状況（北から）



調査区南側実掘状況（南から）

# 序

本書は財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、南口 A 遺跡の調査成果をまとめたものです。

南口 A 遺跡は山形県北西部、庄内地方の中央に位置する庄内町にあります。庄内町は、庄内平野の中央部から月山のふもとまで広がる細長い形の町で、県内でも有数の稲作地帯として知られています。また、地域の悪条件であった強風「清川だし」を利用した自治体では日本一の風力発電施設が有名です。

遺跡の周辺には昭和 49・50 年に発掘調査された東西 28.2m、南北 19.6m、高さ 28m を測る梵天塚墳墓があります。

この度、地域高規格道路整備に伴う余目酒田道路にかかわり、南口 A 遺跡の発掘調査を実施しました。調査では、奈良・平安時代の竪穴建物跡や土坑、溝跡、そして近世・近代の土坑、溝跡、水路跡などが確認され、土師器、須恵器、陶磁器、木製品などが出土し、古代と近世・近代の人々の生活の痕跡が見つかりました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の啓蒙や普及、学術研究や教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、調査において御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成 22 年 3 月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 山口常夫

## 凡　例

- 1 本書は、余目酒田道路建設に係る「南口 A 遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 既刊の年報、速報会資料、調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。
- 3 調査は国土交通省東北地方整備局酒田河川国道事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 本書の執筆は氏家信行（第 I・II・3・4・V 章）、渡部裕司（II-1・2・III 章）が担当し、柏倉俊夫、小笠原正道、鎌上勝則、安部実、阿部明彦、黒坂雅人、伊藤邦弘が監修した。
- 5 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第 X 系（世界測地系）により、高さは海拔高で表す。方位は座標北を表す。
- 6 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

S T……竪穴建物跡 S K……土坑 S D……溝跡・水路跡 S P……ピット  
S X……性格不明遺構 R P……登録土器 P……土器 W……木製品・木

- 7 遺構実測図の縮尺は各図に示し、各々スケールを付した。図中の網点は下記を表している。なお、遺構実測図中の土器は 1/8 の縮尺で採録した。  
土器……■ 木製品・木……■ 種……■
- 8 遺物実測図の縮尺は各図に示し、各々スケールを付した。なお、土器実測図の断面を黒く塗りつぶしたものは須恵器を、網点を入れたものは黒色処理を表している。また、断面実測図の拓影図は右側に外面、左側に内面を表した。
- 9 遺物観察表は観察項目の違いから、遺物観察表（木製品は除く）と木製品観察表として掲載した。なお、遺物観察表・木製品観察表中の（ ）内の数値は図上復元による推計値、（ ）内の数値は残存値を示し、層位の F は覆土、Y は床面を、墨書き器の「□」は解読不明文字を示す。
- 10 基本層序および遺構覆土の色調記載については、2008 年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」によった。

## 調査要項

遺跡名	南口A遺跡					
遺跡番号	昭和 61 年度登録					
所在地	山形県東田川郡庄内町余目字南口					
調査委託者	国土交通省東北地方整備局酒田河川国道事務所					
調査受託者	財団法人山形県埋蔵文化財センター					
受託期間	平成 21 年 4 月 1 日～平成 22 年 3 月 31 日					
現地調査	平成 21 年 5 月 13 日～平成 21 年 9 月 16 日					
調査担当者	調査課長	阿部明彦	課長補佐	黒坂雅人	専門調査研究員	氏家信行（調査主任）
	調査員	渡部裕司				
調査指導	山形県教育庁文化財保護推進課					
調査協力	庄内町教育委員会					
	山形県教育庁庄内教育事務所					
業務委託	基準点測量業務	株式会社出羽測量設計	遺構写真実測業務	国際航業株式会社	遺物保存処理業務	株式会社吉田生物研究所
発掘作業員	阿部美恵子	池田保	伊藤敦子	伊藤繁夫	伊藤征一	伊藤弘子
	上野由美子	大瀧清子	工藤秋雄	工藤久美	小鷹忠一	後藤智子
	斎藤正一	佐藤晃仁	佐藤和夫	佐藤弥一	武田誠	土田恵子
	兵田悦	桶渡一雄	堀健	水尾信也	（五十音順）	
整理作業員	岩見茜	佐藤加奈子	山口敦子	（五十音順）		

# 目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の概要	1
II 遺跡の概観	
1 地理的環境	4
2 歴史的環境	4
3 基本層序	9
4 遺構と遺物の分布	9
III 遺構と遺物	12
IV 理化学的分析	
本製品の樹種調査結果	18
V 調査のまとめ	20
報告書抄録	卷末
南口A 遺跡遺構配置図	付図

## 表

表1 遺跡地名表	7	表3 遺物観察表	46
表2 木製品同定表	19	表4 木製品観察表	47

## 図 版

第1図 調査区概要図	3	第15図 S T 252 壓穴建物跡	31
第2図 地形分類図	5	第16図 S K 13・51・79・92・184・ 220・221・222 土坑	32
第3図 遺跡位置図	6	第17図 S K 223・227・277・280・354 土坑、 S P 82・83・336・349 ピット	33
第4図 調査区基本層序	10	第18図 S K 284・289・292・317・ 318 土坑、S D 319 溝跡	34
第5図 古代土器分布図	11	第19図 S K 273 土坑、S D 275 溝跡	35
第6図 遺構配置図の割付図	22	第20図 S D 287・307 溝跡	36
第7図 遺構配置図1	23	第21図 S K 365 土坑、S D 305 溝跡	37
第8図 遺構配置図2	24	第22図 S D 140・141 水路跡(1)	38
第9図 遺構配置図3	25	第23図 S D 140・141 水路跡(2)	39
第10図 遺構配置図4	26	第24図 S D 140・141 水路跡(3)	40
第11図 遺構配置図5	27	第25図 遺構出土遺物(1)	41
第12図 遺構配置図6	28		
第13図 遺構配置図7	29		
第14図 遺構配置図8	30		

第 26 図 遺構出土遺物（2）	42	第 28 図 遺構外出土遺物（2）	44
第 27 図 遺構出土遺物（3）、遺構外出土遺物（1）	43	第 29 図 遺構外出土遺物（3）	45

## 写真図版

巻頭写真 1 遺跡全景	写真図版 10 S D 305 溝跡
巻頭写真 2 調査区全景	350 ~ 370 ~ 810 ~ 845 G 完掘全貌
巻頭写真 3 調査区北側完掘状況	写真図版 11 S D 140・141 水路跡
巻頭写真 4 調査区南側完掘状況	写真図版 12 須恵器壺・蓋、S D 141 出土磁器
写真図版 1 遺跡全景	写真図版 13 S D 141 出土遺物、須恵器壺・甕類
写真図版 2 S T 252 竪穴建物跡	写真図版 14 S K 79・292、S P 82、S D 275 出土須恵器
写真図版 3 S K 92 土坑	写真図版 15 S D 307、遺構外出土須恵器
写真図版 4 S K 220・221 土坑	写真図版 16 S K 13・284、S D 141、遺構外出土須恵器
写真図版 5 S K 222 土坑	写真図版 17 S P 82、S D 287、遺構外出土須恵器
写真図版 6 S K 365 土坑	写真図版 18 S K 289・317、遺構外出土須恵器・土師器
写真図版 7 S K 13・51・79・227・277・ 280 土坑、S P 82・349 ピット	写真図版 19 S D 307、S D 141、遺構外出土土師器
写真図版 8 230 ~ 245 ~ 830 ~ 850 G 完掘状況	写真図版 20 S D 305・141、遺構外出土遺物
250 ~ 255 ~ 835 ~ 865 G 完掘状況	写真図版 21 S K 365、S D 141・305、遺構外出土遺物
265 ~ 285 ~ 830 ~ 855 G 完掘状況	写真図版 22 S K 92・220・222・365、S D 141・305 出土木製品
写真図版 9 350 ~ 360 ~ 830 ~ 845 G 完掘状況	写真図版 23 木材の顕微鏡写真
S D 275・307 溝跡	

# I 調査の経緯

## 1 調査に至る経過

遺跡は、県北西部の庄内平野のほぼ中央に位置する庄内町の余目字南口地区に所在する。余目駅から南西約2kmの水田地帯に立地する。北側に県道43号余目加茂線が走り、標高約7mを測る。

南口A遺跡は、昭和61年に県営は場整備事業の県道43号余目加茂線の事業計画に際して山形県教育委員会によって試掘調査が行われ、近世の遺跡として登録された。

翌、昭和62年の県道43号余目加茂線建設工事の際に、県教育委員会によって立会調査が実施されているが、遺構・遺物ともに検出されなかった。

今回の調査は、余目酒田道路の整備に伴う緊急発掘調査として実施された。

余目酒田道路は、地域高規格道路新庄酒田道路の一部で、庄内町余目新田から酒田市東町を結ぶ総延長12.7kmの道路である。一般国道7号や47号の渋滞の緩和、災害時の緊急輸送路の確保、緊急医療体制の充実、そして庄内・最上両地域との連携強化の促進が期待される4車線の道路である。

余目酒田道路は平成16年度に事業に着手し、平成18年度から工事開始と計画されたことから、工事に先行して平成17年度山形県教育委員会による事業実施路線内の表面踏査が行われた。その結果、南口A遺跡が事業用地内に含まれることが分かり、遺跡の保存状況を把握する試掘調査を行う必要性のあることが確認された。

試掘調査は、遺跡範囲内の工事予定地について山形県教育委員会により、平成20年の10月と11月の2度に亘り実施された。

試掘調査では、事業計画区域内に15m×10～20mの21本のトレンチを設定して、重機による掘り下げを行った。その後、壁面と底面を精査し堆積土と遺構及び遺物の有無を確認したところ、11本のトレンチから溝跡、土坑、水路などの遺構が検出され、13本のトレンチから須恵器、赤焼土器、近世の陶器などの破片が出土した。

この結果、遺跡範囲内の道路予定地について土木工事

を実施する際には、遺跡保存のための協議及び文化財保護法に基づく手続きが必要であり、遺跡範囲内である約120mの区間ににおいては発掘調査が必要と判断された。

この試掘調査の結果を受け、記録保存を目的とする緊急発掘調査を行うことで協議が整った。

その後、山形県教育委員会・国土交通省酒田河川国道事務所・財團法人山形県埋蔵文化財センターの三者による協議の結果、遺跡範囲内の事業実施区域である約6,500m<sup>2</sup>の緊急発掘調査を平成21年度に山形県埋蔵文化財センターが行うこととなったものである。

## 2 調査の概要

### A 発掘調査

調査に先立って、平成21年4月23日に国土交通省酒田河川国道事務所、山形県埋蔵文化財センター、山形県教育委員会、庄内教育事務所、庄内町教育委員会による、平成21年度国土交通省酒田河川国道事務所関係事業に係る発掘調査に関する調整及び打ち合わせを行った。

打ち合わせでは、調査期間、調査体制、調査方法、事務所・駐車場用地、土置き場などについて最終確認を行った。その際に、調査説明会の広報や周辺地区への周知を庄内町教育委員会へ、周辺の小中学校への周知を庄内教育事務所へ依頼した。

発掘調査は5月13日から開始し、最初に調査区を設定して、遺構確認面までの深さを調べる為の線掘りを行った。そして、重機による表土除去を5月15日から開始して5月22日に終了した。

表土除去と併行して遺構の確認面を平らにする面削り作業を行い、その後、遺構を検出するための面整理作業を5月27日から7月6日まで行い、調査区全体の遺構を検出した。遺構の検出作業と併行して平板測量で100分の1の遺構配置図を作成、検出状況の写真撮影を行った。

5月27日には業務委託による2点の基準点と3ヶ所の水準点設置及び10m×10mの方眼単位のグリッドの設置を行った。

業務委託によるグリッド設置終了後、このグリッドを

## I 調査の経緯

基準にトータルステーションを使用して、5m×5mの単位のグリッドを設定した。

グリッドは、世界測地系をもとに平面直角座標系第X系： $X = -128230.000$ 、 $Y = -81820.000$ を $X = 230G$ 、 $Y = 820G$ とし、南北軸（X軸）は北から南へ、東西軸（Y軸）は東から西へ、昇順で標準座標の整数下3ヶタを割り当てた。

遺構検出状況の全体写真を撮影した後に、遺構に登録番号を付して精査作業を開始した。遺構の掘り下げは、覆土をベルト状に残し、または半截して掘り下げ、土層の写真撮影、断面図作成、覆土観察の後に完掘した。

遺物は、略完形または一括土器について登録番号を付し、他は遺構毎またはグリッド毎に取り上げた。

遺構の精査と併行して、遺構平面図や土層断面図、記録保存のための写真撮影など諸記録作業を行った。

調査期間中の6月25日には、近隣の余目第一小学校6年生47名が体験学習に訪れ、遺構検出や遺構精査などの現場作業を体験し、遺跡のことや調査の方法などを学習した。

8月7日には、鶴岡市の鶴岡北高等学校2年生19名がキャリアセミナーの遺跡発掘体験学習に訪れた。生徒達は、埋蔵文化財について発掘調査や記録保存などの話しを聞いた後、現場において遺構検出、精査、測量作業などの体験実習を行った。

また、調査終盤の8月26日には、地元の庄内町文化財保護委員7名と庄内町教育委員会3名が発掘調査の様子や検出された遺構、出土した遺物などの見学に訪れた。

9月9日に遺構測量図化のためのラジコンヘリコプターを使って空中写真を撮影する業務委託を行った。

そして、9月11日には調査の成果を広く公表する調査説明会を開催し、地元庄内町の方を中心多く参加者を得た。

翌週の9月15日に、国土交通省酒田河川国道事務所の担当者と現地引き渡しの打ち合わせを南口A遺跡の現場で行い、危険個所の埋め戻しや調査事務所と付帯施設の撤去などを確認した。

翌9月16日に発掘調査機材の撤収を行い、現地調査を終了した。

発掘調査は5月13日から9月16日までの延べ127日、実働86日間であった。

## (2) 整理作業

整理作業は9月1日から開始し、最初に、現場で撮影した遺構写真の整理作業を行い、現地調査が終了した翌日の9月17日からは出土遺物の基礎整理（洗浄・注記）作業を行った。

遺物の基礎整理は、出土遺物の洗浄をした後に注記作業をした。注記は遺跡名「南口A」と出土地点を明記し、現場で登録したものには登録番号を付した。木製品は洗浄後、少量の水を入れたボリエチレンチューブに遺跡名・出土地点を明記したラベルと共に梱包した。

修復作業は古代の須恵器、土師器と近世・近代の陶磁器に分類した後、遺構ごとに接合を行い、さらに遺構周辺のグリッド出土遺物との接合を実施した。

接合終了後、遺構出土遺物を中心に須恵器・土師器は状態の良いものについて抽出し、陶磁器は近世のものを主に抽出した。

抽出した遺物は実測を行い図面を作成した後に、底部や表裏面の拓本を採り、遺物観察表の作成を行った。遺物の整理作業と併行して、業務委託の遺構測量図の校正を進めた。

遺物実測図はその後デジタルトレースを行い、拓本と組み合わせて編集を行った。

遺構全体図は遺構測量業務委託のデジタルデータに手取りの図面を組み合わせて作成した。また、遺構個別図は、手取りの平図面と断面図を整合させた後、デジタルトレースして平面図、断面図と土層注記と共に編集を行った。

遺構写真は、現場で撮影したものから報告書に掲載するものを抽出した。遺物は、欠損箇所を補填する修復作業を終了した後に、単体または集合での写真撮影を行い、報告書に掲載する写真を選別した。

その後、遺構図・遺物図・遺物観察表・写真図版の編集を順次行ながら、表・図版・写真図版などの編集作業と併行して本文執筆を行った。

なお、木製品の保存処理の業務委託を年度内納期で実施した。



第1図 調査区概要図

## II 遺跡の概観

### 1 地理的環境

南口A遺跡がある山形県東田川郡庄内町は、平成17年7月に旧余目町と旧立川町が合併して誕生した新しい町である。

山形県の県庁所在地である山形市より、北西に直線距離で約80kmに位置している。

庄内町は、日本有数の穀倉地帯である庄内平野のはば中央部から南東部かけて位置しており、北には酒田市、南側には鶴岡市、三川町があり、町の東側では最上郡戸沢村、南東部では大蔵村と接している。町の総面積は249.26km<sup>2</sup>で、人口は約23,000人である。

庄内町の町名の由来ともなっている庄内平野は、南北に長い海岸線を持ち、年間を通して日本海からの季節風が強く吹きつけている。中でも庄内町はこの西風と最上川から吹きつける東風（清川ダシ）の通り道となっており、全国でも有数の強風地帯である。この地域では長い間この風に悩まされてきたが、現在は風車を設置し、強風を活用した風力発電が行われている。立川地区の風車は、日本における風力発電の草分け的存在として全国にも知られている。

地形的には、北側に「出羽富士」とも呼ばれる山形県の最高峰鳥海山（標高2,236m）がそびえ、東側には出羽三山の聖地月山を中心とし、内陸部と庄内地方を隔てている出羽山地があり、そこから日向川、新井田川、赤川、温海川等の河川が日本海へ注がれている。また松尾芭蕉の奥の細道にも詠まれた最上川が、山形県内陸部を縦貫した後、庄内平野へと至る。このように多くの河川が平野を潤しており、近世以降にも盛んに水田開発が行われている。現在では山形県の主力品種である「はえぬき」を中心とした良質な米の産地として全国的にも知られるようになっており、平成21年には新品種「つや姫」の生産も始まり、今後もさらに良質米の産地として成長していくことが予想される。

庄内町の地勢をみてみると、町域南東部に月山を中心とする出羽山地とそれに続く丘陵・台地が広がり、中央

部にかけては最上川、立谷沢川の侵食・堆積作用によつて形成された河岸段丘が発達している。これらの段丘上には縄文時代の遺跡もいくつか見られる。

町域北西部は扇状地・三角州・自然堤防などが発達し、庄内平野の一部となっている。

南口A遺跡は庄内町の北西部にある余目地区に所在する。JR余目駅の南西約2km、宅地化が進んでいる町中心部の外縁部に位置する。また、最上川左岸に位置し、最上川からは南へ約4.7km離れている。宮城県大崎市を起点とし、宮城・山形両県の県北地域を繋ぐ国道47号は遺跡の600m北側を通っている。現在、遺跡範囲の大半は水田となっているが、県道43号余目加茂線および豚舎も一部遺跡範囲に含まれている。

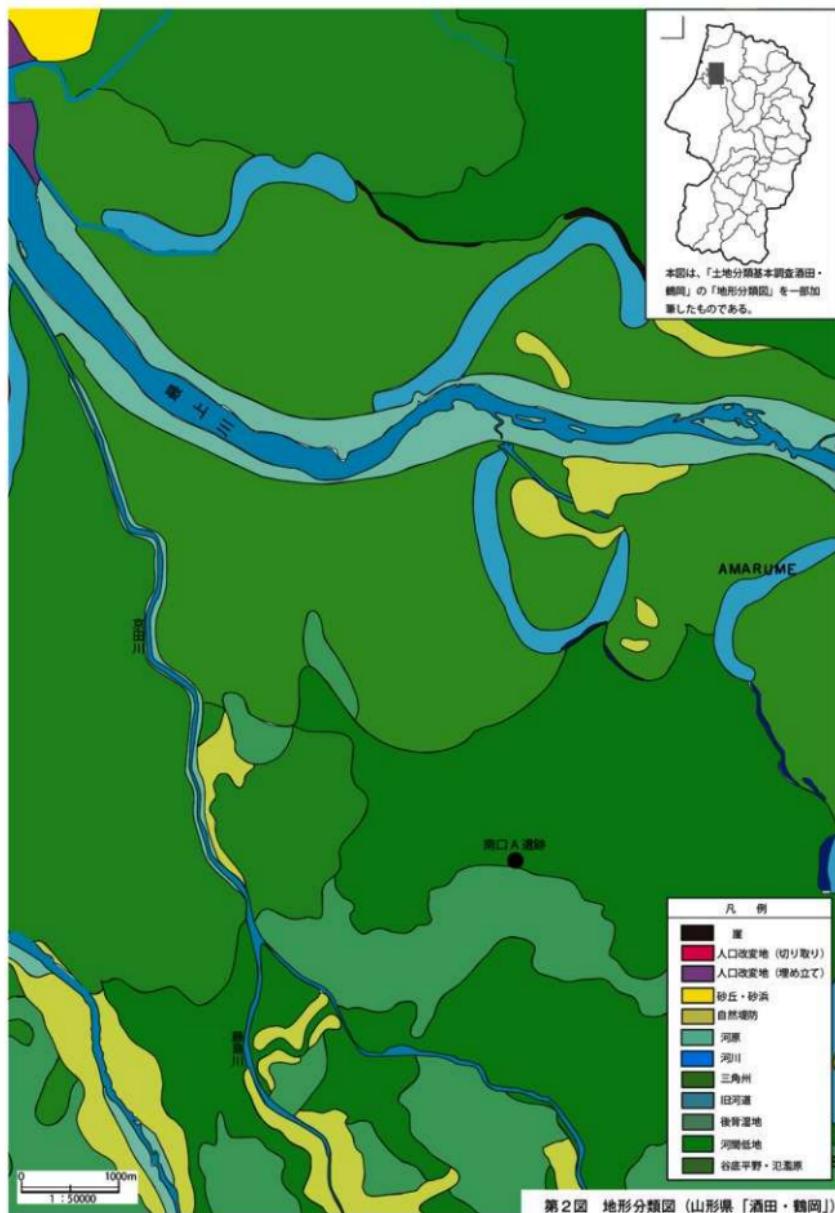
### 2 歴史的環境

南口A遺跡がある庄内地方の遺跡を概観する。旧石器時代から縄文時代にかけては、その多くが丘陵や高位段丘上に立地している。後期旧石器時代から弥生時代にかけて営まれた鶴岡市の越中山遺跡群や縄文時代中期～後期の遊佐町小山崎遺跡、吹浦遺跡などが知られている。

弥生時代以降は庄内平野の縁辺部でも集落が営まれるようになり、弥生時代前期の生石2遺跡では、北九州の遠賀川様式の特徴を持つ土器が多数出土している。

古墳時代の遺跡は、田川地区の平野中央部でも確認されるようになる。鶴岡市には、長持型石棺で知られる菱津古墳や、畠田遺跡、行司免遺跡、助作遺跡といった集落跡が存在する。他にも、鶴岡市（藤島）の鷺畠古墳など古墳時代の遺跡はいくつか見されている。庄内町においても、昭和20年頃に横島集落の東側で箱式石棺の石材が出土しており、現在墳丘などはないが、かつて余目地区横島にも古墳が存在したことを示している。

古代以降になると、庄内平野ではさらに多くの遺跡が発見されている。その多くは集落であるが、酒田市に所在する城輪柵跡、八森遺跡などは古代出羽国役所跡と考えられる。文献資料などによると、和銅元年(708年)、庄内地方に出羽郡が建郡され、その後出羽国となる。出



## II 遺跡の概観



第3図 遺跡位置図

表1 遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
1	南口A道路	奈良・平安・近世・近代	集落跡	26	大塚道路	平安	集落跡
2	勝樂寺跡	室町	寺院跡	27	五反田遺跡	平安	集落跡
3	家根合道路	縄文・平安	包蔵地	28	上台道路	平安	集落跡
4	荒田道路	平安	集落跡	29	廿六木遺跡	平安	包蔵地
5	三軒屋敷道路	平安	集落跡	30	李濱沼遺跡	平安	集落跡
6	田谷B道路	平安	散布地	31	千河原遺跡	平安・鎌倉～室町	包蔵地
7	田谷遺跡	縄文(晚期)	包蔵地	32	桙柳寺跡	室町	寺院跡
8	廻館跡	戦国	館跡	33	砂越城跡	室町	城館跡
9	北畠沿道路	平安～鎌倉	集落跡	34	天神堂遺跡	平安・鎌倉	散布地
10	夜道路	中世	集落跡	35	桜林(旧惣田)道路	平安末～鎌倉	集落跡
11	大日堂道路	平安	集落跡	36	西田道路	平安	集落跡
12	矢口道路	平安	集落跡	37	早稻田遺跡	平安末～鎌倉	集落跡
13	私田道路	平安	散布地	38	本川道路	平安末～鎌倉	集落跡
14	梵天塚墳墓	平安	墳墓	39	福島道路	平安・鎌倉	散布地
15	南口B道路	平安・近世	散布地	40	熊手島道路	平安	散布地
16	余目館跡	南北朝	館跡	41	手藏田6・7道路	平安	集落跡
17	宮曾根館跡	室町	館跡	42	手藏田5・8道路	平安	集落跡
18	久田遺跡	縄文	集落跡	43	手藏田9・10・11道路	平安・中世	集落跡
19	金沼館跡	鎌倉後期	館跡	44	手藏田12道路	平安・室町	集落跡
20	大沢館跡	中世	館跡	45	手藏田2道路	平安	集落跡
21	土橋遺跡	平安	集落跡	46	手藏田4道路	平安	集落跡
22	大日塚遺跡	平安後葉～近世	集落跡	47	熊野田遺跡	平安・中世	集落跡
23	上川原遺跡	鎌倉	集落跡	48	萩原道路	平安	散布地
24	門田館跡	中世	館跡	49	土崎道路	平安	集落跡
25	余目城跡	平安中期～鎌倉	城館跡	50	亀ヶ崎城跡	中世・近世	城館跡

羽郡の建郡以後、庄内地方に郡衙や国府が造られたと考えられ、城輪柵跡は平安時代の出羽国府であると考えられている。平安時代には、城輪柵跡周辺が出羽国の中核地であったことは間違いなく、さらに城輪柵跡から南東

7.1kmの高尾山南西部の丘陵では、須恵器や城輪柵跡出土の瓦と同様の瓦を焼成した泉森窯跡が操業していた。国府の造営やそれに伴う窯の操業などは、中央政権による古代律令制が庄内地方においても確実に施行されてい

## II 遺跡の概観

たことを意味する。出羽国府については、出羽国建國時の国府の所在地や秋田城への国府移転、さらに庄内地方への再移転など、その変遷や所在地が未だに不明な点が多い。庄内平野において城輪柵跡以外にも官衙関連の遺構・遺物が見つかっている遺跡はいくつもあり、その役目や位置付けは今後さらに検討し解明する必要があるだろう。

さらに文献には、奈良・平安時代の庄内地方・最上・村山郡に「水駅」が設置されていたことが記されている。通常、古代律令制下の駅は、駅備え付けの駅馬を置き、早馬を走らせ公文書を運ぶという役割を担っていたのだが、最上川沿いに設置された野後駅・避翼駅・佐芸駅・白谷駅は、駅馬以外に船を備え、川を利用していたのである。これは全国でも例をみない駅であるが、その所在地は未だにわからっていない。その推定地は複数あり、そのうちの一つで野後駅と考えられる、大石田町駒籠桶跡の調査が山形県教育委員会によって行われている。未だ不明な点が多いが、この調査によって今後水駅の様相が少しづつ解明されしていくだろう。

庄内町余目周辺の南口A遺跡と同時代の遺跡を見てみると、昭和49年に調査され、9世紀～11世紀代の須恵器・土師器が出土した梵天塚墳墓がある。この遺跡は、古墳時代の古墳とも考えられていたが、調査の結果平安時代の塚であることが判明している。また、町中心部の北東側に所在する千河原遺跡、上台遺跡は道路建設などによって昭和50年代に調査が行われている。両遺跡とも大規模な発掘調査ではないが、古代の集落と考えられる遺構群が発見されており、文献資料などには残っていない余目地区的歴史を知る上で貴重なものである。

最上川を挟んで北にある飽海地区では、城輪柵跡や八森遺跡など古代律令制を象徴する遺跡群が存在する。それに対し、最上川南岸部の田川地区では主に集落跡が発見されており、この地では平安時代頃には一般的な律令制下の村落が営まれていたと考えられる。

平安時代以降、鎌倉・室町時代頃までの庄内地方に関する文献資料はわずかにあるのみで、ほとんど現存していない。戦国時代以降、上杉氏・最上氏・酒井氏と時代がすすめば資料も比較的多く残っているが、それ以前に関してはまだまだわからないことが多い。しかし古代同様に開発などに伴う発掘調査は幾度か行われており、

文献資料だけでは分からなかったことも徐々に明らかとなってきている。鶴岡市（旧藤島町）勝楽寺遺跡からは、13世紀の屋敷跡が発見されている。桁行5間、梁間3間の南北棟掘立柱建物や木造りの井戸戸、土坑といった遺構群と、珠洲焼、越前焼、中国産の青磁・白磁などの遺物が多数出土し、中世の人々の暮らしの一端を垣間見ることができる。その他に、中世の人々の信仰を知る遺構として、経塚が挙げられる。経塚は、仏教における末法思想の影響を受け平安時代末から中世にかけて各地に築かれた。庄内地方でも鶴岡市湯田川経塚、庄内町狩川の笠山経塚などいくつかの例が知られている。山形県内で発見されている経塚では、経典を入れる外容器として珠洲焼の壺や壺を用いている例が多い。珠洲焼は、石川県能登半島の先端部に位置する珠洲市周辺で焼かれた焼き物で、古代律令制の下全国各地で作られた須恵器の系譜を引く陶器である。その器種は須恵器ほど多様なものではなく、壺・壺・鉢といった日常生活で使用されるものが作られた。その流通範囲は非常に広く、主に北陸から東北までの日本海沿岸各地に及ぶ。庄内地方においては、中世の集落跡や経塚から多数出土しているほか、温海沖などの海底からも引き揚げられており、船を用いた海上交易によって各地に運ばれていた様子が窺える。

南北朝時代以降余目地を治めていたのは武藏国賀美郡（現在の埼玉県児玉郡）を本拠とした安保氏の一族である。安保氏は、応安5年（1372）、現在の庄内町余目館に城館を築き、以後天正8年に最上義光によって滅ぼされるまでの間、16代に渡って余目を支配し、現在も余目館の跡地に建つ乘慶寺には安保氏供養塔が残されている。

近世以降の庄内地方は、最上氏・酒井氏の統治にあり、慶長17年（1612年）、最上義光の家臣北館大学助利長によって、立谷沢川から取水し最上川左岸の原野を開発するため狩川大堰（北館大堰）が造られた。この北館大堰以外にも、江戸時代には大規模な河川の改修や堰の灌漑工事が幾度も行われている。現在でも日本有数の稲作地帯である庄内平野の基礎は江戸時代に築かれ現代に受け継がれている。

### 3 基本層序

遺跡は、庄内町余目の南口の集落から南方約150mに位置し、標高7mを測る水田に立地する。

基本層序は、調査区の北側、東側、南側で各1ヶ所、西側で2ヶ所の計5ヶ所で観察した。全体的に遺構確認面までの深さは約20～30cmと浅い。以下に概略を述べる。

層序1は、調査区北側の230～840G付近で層序を確認した。土層は5層に大別され、I層は水田の耕作土で、草の根を多量に混入し、厚さ10cm堆積し、II層は褐灰色の粘土で水田の盤土となる。III層は黒色の粘土で、明褐色シルトを斑状やブロック状に含む。IV層は灰黄色粘土で明褐色シルトを斑状に含む。V層はオリーブ灰色粘土が堆積する。遺構確認面は地表面から約35cmの深さのIII'層上面となる。

層序2は、調査区北西側の250～865G付近で確認した。5層に大別され、I～III層及びV層は概ね層序1と同様であるが、4層目はIV'層で灰黄色の粘質シルトになる。遺構確認面はこのIV'層の上面で、表土からの深さは約30cmである。

層序3は、調査区東側300～820G付近で確認した。3層に大別され、I・II層は層序1・2と同様であるが、3層目にIV層が堆積し、灰黄色粘質シルトに明褐色シルトを点状に含む。このIV層上面が遺構確認面で、表土からの深さは約20cmと浅い。

層序4は、調査区南西側320～870G付近で確認した。4層に大別され、I～III層は層序1・2と、IV層は層序3と同様である。遺構確認面はIV層上面で表土からの深さは約30cmとなる。

層序5は、調査区南側360～840G付近で確認し、4層に大別される。I・III層は層序1・2と、IV層は層序3・4と同様であるが、2層目の水田盤土は、褐灰色粘土に明褐色シルトと灰黄色シルトを斑状やブロック状に含む。II'層が堆積する。遺構の確認面は表土から約30cmのIV層上面となる。

以上、5ヶ所の層序から、1・2層目は水田の耕作土と盤土で、調査区の北・西・南には3層目に黒色粘土が厚さ10～15cmで堆積する。遺構確認面はIII'・IV'・IV'層の上面で、表土からの深さは約20～35cmとなる。

### 4 遺構と遺物の分布

今回の調査では、遺跡範囲内の事業実施区域である面積約6,500m<sup>2</sup>を調査した。検出された遺構は竪穴建物跡、土坑、溝跡、水路跡、柱穴などで、時代は奈良・平安時代、近世・近代のものである。遺物は整理箱にして16箱出土した。奈良・平安時代の土師器、須恵器と近世・近代の陶磁器が大半を占める。他に、古銭や板状、棒状の木製品も出土している。以下にその分布状況を述べる。

遺構は、調査区全体に分布するが、調査区のはば中央を横断する2本の水路の北側と南側で顕著な違いが見られた。水路北側は、土坑、溝跡、柱穴などが検出されたが、極めて希薄である。北端の230～240～835～850G、西側245～255～855～865G、水路付近290～300～825～875Gに遺構の集中が見られるものは希薄となり、重複もほとんど認められない。

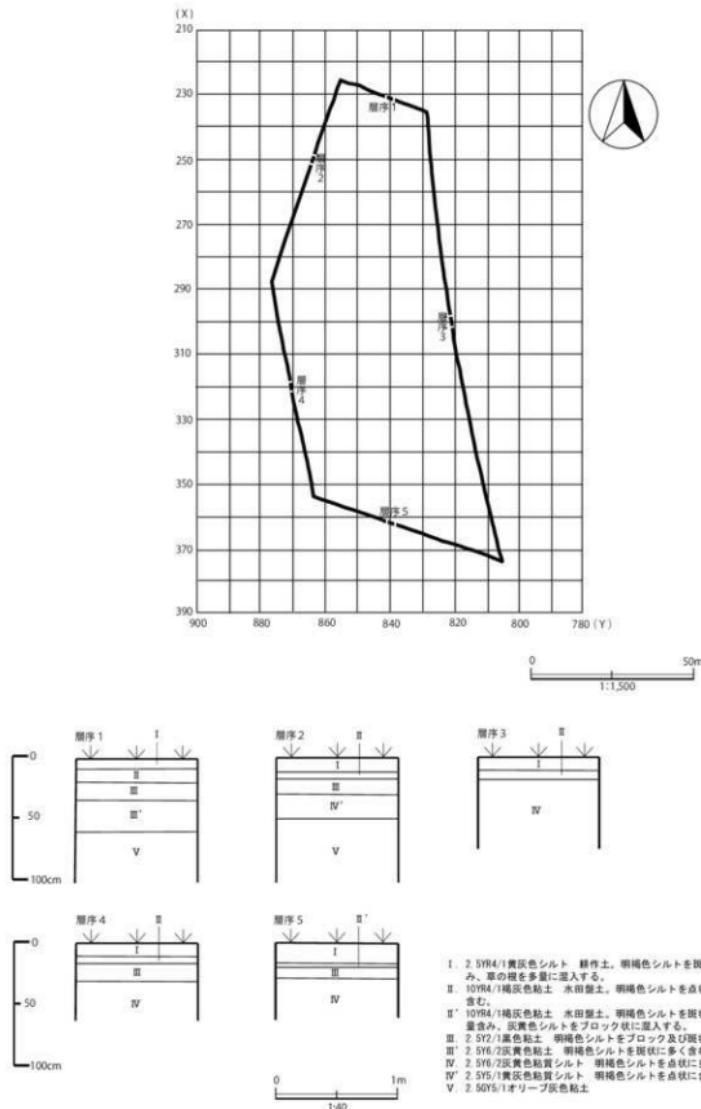
水路の南側は竪穴建物跡、土坑、溝跡、柱穴が検出され、ほぼ全体に遺構が分布している。特に、西側325～345～860～870Gには土坑、南西端350～365～815～850Gは土坑、溝跡、柱穴が集中し重複も多数見られる。また、340・345～845～850Gには竪穴建物跡があるが、その周辺にも土坑、溝跡、柱穴が多く検出されている。但し、南側でも、西側より東側に遺構が多く分布している様相が認められる。そして、古代の遺構は南側の350～365～815～850Gに集中して分布する。

遺物の分布は、ほぼ遺構の分布と同様であるが、古代の土師器、須恵器と近世・近代の陶磁器や木製品で違いが見られた。

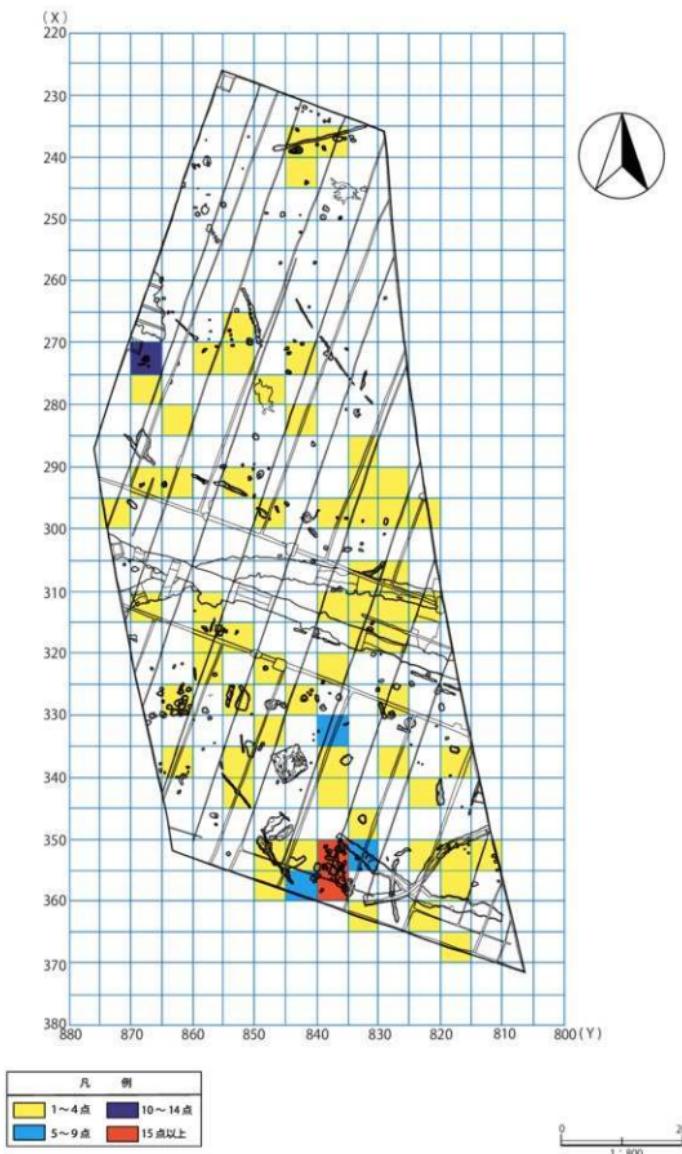
土師器、須恵器は破片が大半を占めはば一個体となるものは数点である。その分布は主に調査区南側に分布し、特に南端の355～360～835～845Gに集中しており、古代の遺構の集中区域とはば一致する。また、335～850Gから墨書き器が1点出土している。

陶磁器は中央の水路S D140・141と南東端のS D305からの出土が大半を占める。古銭は2点出土し、S D305とグリッド出土である。また、木製品は板状のものが調査区北西側のS K92と南西端のS D305の底面から検出されたS K365から、棒状のものは南西で検出されたS K221・222から出土している。

## II 遺跡の概観



第4図 調査区基本層序



第5図 古代土器分布図

### III 遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は竪穴建物跡1棟、土坑131基、溝跡34条、水路跡2条、ピットなどである。出土した遺物には、須恵器、土師器、黒色土器、木製品、陶磁器や金属製品などがある。時代は、奈良・平安時代、近世・近代と考えられる。以下に主な遺構と遺物の概略を遺構毎に述べる。

#### S T252竪穴建物跡（第15図）

調査区南側340-845G付近に位置する。平面形・規模は、方形を呈しているが、南側は膨らんでいる。東西5.2m、南北5.1mで、南北軸が西へ22度傾いている。遺構の中央部及び東、西、南隅はわずかに盛り上がりしており、奈良・平安時代頃まで各地で造られる竪穴住居の掘方と共に通ずる遺構形態となっている。堆積土は3層確認した。遺構内の周縁部では、検出段階から堆積土と地山面が確認でき、ピット状となっている部分もみられた。これは竪穴を掘る際に残る鋤鉗痕であり、竪穴住居跡の場合、通常は底面付近でみられる。検出時に、この鋤鉗痕が確認できることから竪穴の側壁はほとんどみられない。カマド、建物内柱穴、貼床、炉などの生活痕跡を示す遺構も検出されなかったことから、このS T252が住居として使用されていたのかは不明である。堆積土や規模、平面形から古代の竪穴状遺構と推定されるが、遺構の上層部が後世に大幅な削平を受け、さらに遺物の出土も無いため、正確な時期は特定できない。

#### S K13土坑（第16図、第25図1）

調査区北側240-845G付近に位置する。規模・平面形は、楕円形を呈し、規模は東西1.1m、南北1.1mで長軸が西へ約40度傾いている。堆積土は3層確認し、自然堆積である。3層からは自然木が出土している。出土遺物は、須恵器の壺1が出土した。口縁部はわずかに内湾している。しかし、小破片のため口径や全体の器形は不明で、断面のみの図示となった。

#### S K51土坑（第16図）

調査区北側250-840G付近に位置する。規模・形状は、北側がやや突出した隅丸方形で、東西1.1m、南北1.1m、検出面からの深さ約36cmを測る。断面形は擂鉢形で

ある。堆積土は2層確認し、人為堆積である。遺物は出土していない。

#### S K79土坑（第16図、第25図2）

調査区北側265-865G付近に位置する。遺構の規模・形状は、東西に長い楕円形を呈し、東西70cm、南北60cm、深さ約10cmを測る。底面は平坦で、断面形は逆台形となる。堆積土は1層確認した。出土遺物は、遺構検出面で須恵器壺2が出土している。口縁部は外反し、底部には回転ヘラケズリによって切り離された痕跡が残っている。焼成はややあまく、器壁は全体的に磨滅している。また、土器の色調も全体的に白い。今回の調査で出土した須恵器の無台壺は底部回転糸切り無調整のものがほとんどで、それらとは時期的に異なり、8世紀末～9世紀初頭のものと考えられる。

#### S K92土坑（第16図、写真図版22-85）

調査区中央部275-870G付近に位置する。規模・形状は、西側が突出した楕円形を呈し、東西1.2m、南北1.0m、検出面からの深さ約8cmを測る。底面の形状は、中心部は平坦になっているが、南側および西側は中心部よりも一段低くなっている。堆積土は1層確認し、人為的に埋められている。出土遺物は、底面から板状に加工された2枚の木製品（写真図版22-85）が出土している。この板状木製品は、本来1枚だった板が中心部から割れたもので、U字状の切り込みが1ヶ所認められた。またこの2枚の板を囲むように直径7cm程度の杭が3本底面に打ち付けられている。この板は、その上に柱等を据える際の沈み込み防止のため底面に敷かれていたものとも推測される。また板の周辺に打ち込まれた杭は、板を固定するためのものと考えられる。その他に出土遺物が無いため、遺構の正確な年代は不明である。しかし堆積土等から、近世以降に埋められたと推測される。

#### S K184土坑（第16図、第25図3）

調査区南部330-845G付近に位置する。規模・形状は、北東部が崩れた不整形を呈し、東西1.0m、南北1.1m、検出面からの深さ約18cmを測る。底面は平坦であるが、南側が一部落ち込んでいる。堆積土は、1層確認し

た。出土遺物は、堆積土中から陶器3が出土した。内面にタール状のものが付着している。器種や用途は不明である。また、磁器片も出土したが、小破片のため図示できなかった。磁器片から、近世以降の土坑と推測される。

#### S K220土坑（第16図、写真図版22-84）

調査区南西部335-865Gに位置する。規模・形状は、中央部がくびれた楕円形を呈し、東西2.0m、南北1.2m、検出面からの深さ約33cmを測る。堆積土は1層確認し、人為的に埋められている。他の遺構との重複関係では、S K221より古い。出土遺物は、東側底面から棒状木製品が複数本並べられた状態で出土している。中には、先端を杭状に加工してある写真図版22-84もみられ、杭などを転用して使用したとも考えられる。S K92出土の板と同様に、この木製品の上に柱を据え、その沈み込みを防ぐ目的で設置されたとも推測される。木製品以外の遺物は出土していないが、S K92などと類似した埋土であり、近世以降に埋められた土坑と推測される。

#### S K221土坑（第16図）

調査区南西部335-865Gに位置する。規模・形状は、平面形が不整方形で東西88cm、南北85cm、深さ約14mを測る。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。他の遺構との重複関係では、S K220より新しい。堆積土は1層確認し、人為的に埋められている。出土遺物は、底面より棒状の木製品が1点出土した。S K220と同じように使われた可能性もある。堆積土もS K220と類似しており、ほぼ同時期に使われていた土坑と考えられる。

#### S K222土坑（第16図、写真図版22-83）

調査区南西部330-865G付近に位置する。規模・形状は、平面形は北西部がやや突出した楕円形で、東西1.1m、南北1.2m、検出面からの深さ約17cmを測る。断面形は半円形で、底面は南側の一部が深く掘り込まれている。堆積土は2層確認した。出土遺物は、底面に棒状の木製品が4本並んでいる状況で出土し、中には、先端を杭状に加工している写真図版22-83も出土している。S K220と同じく、柱を据えた際の沈み込み防止のために敷かれたものとも考えられる。S K92やS K220と同じく近世以降に埋められたと推測される。

#### S K223土坑（第17図、写真図版22-87）

調査区南西部335-870Gに位置する。規模・形状は、平面形は東側が張り出す不整方形で、東西1.3m、南北

90cmを測る。検出面からの深さは約20cmを測る。底面は平坦で、堆積土は、1層確認した。遺物は木製品の漆器片写真図版22-87が出土した。外側面に赤漆が塗られ、椀か皿と考えられる。

#### S K227土坑（第17図）

調査区南西部330-860G付近に位置する。規模・形状は、北東部が欠ける隅丸形を呈し、東西1.1m、南北1.0m、検出面からの深さ約24cmを測る。底面は平坦である。堆積土は、2層確認した。遺物は、検出段階で須恵器の小破片が1点出土した。また、底面から10cmほどの木片が出土したが、いずれも小破片のため図示できなかった。

#### S K273土坑（第19図）

調査区南部355-850G付近に位置する。規模・形状は、南北方向に長い不整楕円形を呈し、東西2.4m、南北3.1m、検出面からの深さ約18cmを測る。底面には13cm~42cm程度のビット状の落込みが複数みられる。他の遺構との重複関係では、S D274・275よりも新しい。堆積土は1層確認した。遺物は出土しなかった。

#### S K277土坑（第17図）

調査区南側355-850G付近に位置する。規模・形状は、東西に長い不整楕円形を呈し、西側が細くなる。東西4.4m、南北1.3m、検出面からの深さは約20cmを測る。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦となる。堆積土は2層確認した。遺物は底面付近から自然木と思われる木片が出土した。

#### S K280土坑（第17図）

調査区南側355-855G付近に位置する。規模・平面形は、楕円形を呈し、東西63cm、南北68cm、検出面からの深さは約22cmを測る。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦となっている。堆積土は3層確認し、すべて人為堆積である。遺物は出土しなかった。

#### S K284土坑（第18図、25図4）

調査区南側355-840G付近に位置する。規模・形状は、東側が突出した不整形を呈し、東西1.2m、南北1.2m、深さ8cmを測る。また遺構の一部は、現代の擾乱を受けている。堆積土は1層確認した。出土遺物は、須恵器坏4が出土している。体部から口縁部にかけてわずかに外反している。しかし体部下半と底部は欠損しており正確な時期の特定は難しい。他にも須恵器坏片等が出土したが、小破片のため図示できなかった。出土した遺物は全

### III 遺構と遺物

て検出面付近で発見されている。

#### S K289土坑（第18図、25図5・6）

調査区南側360-840G付近に位置する。規模・平面形は楕円形を呈し、東西1.2m、南北90cm、深さ約10cmを測る。底面南側に幅20cm程の落込みがみられる。堆積土は1層確認した。出土遺物は、黒色土器坏5、土師器坏6が出土している。5は内面に黒色処理が施された坏である。6の外表面下部にはヘラ削り痕と思われる縞が数条確認できる。いずれも全体的に磨滅し、器面調整は判然としないが、6の底部には回転糸切りの痕跡がみられ、ロクロによって整形されたことがわかる。その他にも土師器坏等が出土したが、小破片のため図示できなかった。

#### S K292土坑（第18図、25図7）

調査区南側360-835G付近に位置する。規模・形状は、平面形が南北に長い楕円形を呈し、東西1.9m、南北3.0mを測る。底面は南東隅が落込んでおり、さらに直径20cm～30cm程度の落込みも複数確認できる。また、遺構の一部は現代の搅乱を受けている。堆積土は1層確認した。出土遺物は、須恵器坏7が出土している。口縁部はわずかに外反し、底部には回転糸切りの痕跡が残る。9世紀中頃～後半頃と考えられる。

#### S K317土坑（第18図、25図8）

調査区南側360-840G付近に位置する。規模・形状は、長軸が西へ37度傾く楕円形で、長軸2.4m、短軸1.2m、深さ約8cmを測る。底面は平坦である。一部が現代の搅乱を受けている。堆積土は1層確認した。出土遺物は、堆積土中より須恵器壺8が出土している。外面には叩き目がみられ、内面は叩き調整の後に、ヘラ状の工具で再調整した痕跡が確認できる。他にも器種不明の土師器片が出土しているが、小破片のため図示できなかった。

#### S K318土坑（第18図）

調査区南側355-840G付近に位置する。規模・平面形は、楕円形を呈し、東西46cm、南北58cm、深さ約9cmを測る。底面は平坦である。堆積土は1層確認した。出土遺物は、土師器坏、須恵器坏等が出土しているが、小破片のため図示できなかった。

#### S K354土坑（第17図）

調査区北西部275-870G付近に位置する。規模・平面形は、東西に長い長方形を呈し、東西65cm、南北24cm、深さ約16cmを測る。堆積土は1層確認した。出土遺物は、

検出面付近で器種不明の土師器片や須恵器壺の破片が多く出土したが、いずれも小破片のため図示できなかった。

#### S K365土坑（第21図、写真図版21-78）

調査区南部365-830G付近に位置する。規模・平面形は楕円形を呈し、東西89cm、南北98cm、検出面からの深さは20cmを測る。底面は南側が深く掘り込まれている。堆積土は2層確認した。他の遺構との重複関係は、SD 305-306より古い。SD 305を完掘した段階で底面から検出された。出土遺物は、底面より板状木製品（写真図版21-78）が出土した。SK 92などと同様に、柱等を据えた際の沈み込みを防ぐために設置されたものと考えられる。片面に凹凸の加工痕があることから、もとは建築部材だったものを転用して敷いたと考えられる。堆積土等から、SK 92と同様に近世以降の遺構と推測される。

#### S P82ピット（第17図、25図9）

調査区北側275-860G付近に位置する。規模・形状は、平面形が楕円形を呈し、東西44cm、南北35cmを測る。断面形は逆台形である。堆積土は1層確認した。出土遺物は、検出面付近で須恵器台付碗9が出土している。身が深く壺ではなく碗とするのが妥当であろう。口縁部はやや外傾している。また遺構外ではあるが、SP 82が位置する275-860Gでは、須恵器の蓋42が出土している。この42と9は、口径が一致し組み合わせることができ、さらに色調や胎土・焼成具合などが同じであるため蓋と有台碗のセットとして焼成・使用されていたものと推測される。两者とも8世紀末～9世紀初頭と考えられる。

#### S P83ピット（第17図、25図10）

調査区南側275-855G付近に位置する。規模・形状は、平面形が楕円形を呈し、東西65cm、南北45.2cm、深さ約17cmを測る。断面形は逆台形である。堆積土は1層確認した。出土遺物は、須恵器坏10が出土している。口縁部と体部上側のみの小破片で、口縁部径も不明である。口縁部はわずかに外傾する。

#### S P336ピット（第17図）

調査区南側335-840G付近に位置する。規模・形状は、平面形が南北に長い楕円形を呈し、東西35cm、南北51cm、深さ約7cmを測る。断面形は逆台形である。堆積土は1層確認した。出土遺物は、須恵器壺の部体が出土している。外面には格子叩き、内面には同心円文当て具痕がみられるが、小破片のため図示できなかった。

**S P 349ピット** (第17図)

調査区中央部305~840G付近に位置する。規模・形状は、平面形が円形で、東西75cm、南北75cm、検出面からの深さ30cmを測る。断面形は擂鉢型を呈する。堆積土は3層確認した。遺物は出土しなかった。

**S D 275溝跡** (第19図、25図11)

調査区南側355~850G付近に位置する。規模・形状は、全長10.5m、上幅24~86cm、下幅8~20cm、検出面からの深さは約10cmで、断面形は半円形を呈する。他の遺構との重複関係は、S K273、S P 279より古く、S K276より新しい。堆積土は2層確認した。また、遺構の一部が現代の搅乱を受けている。出土遺物は、遺構南部の堆積土中から須恵器坏11が出土している。底部には回転糸切りの跡が確認でき、口縁部は外傾している。9世紀中頃の時期と考えられる。

**S D 287溝跡** (第20図、25図12)

調査区南側355~840G付近に位置する。規模・形状は、確認された総長が2.8m、上幅40~80cm、下幅10~49cm、検出面からの深さは約8cmを測る。断面形は半円形を呈する。他の遺構との重複関係は、S D 307よりも古い。また遺構の一部は、現代の搅乱を受けている。堆積土は1層確認した。出土遺物は、須恵器坏12が出土している。底部には回転糸切りの痕跡が確認できる。底部と体部の一部のみが残存している。

**S D 305溝跡** (第21図、25図13~15、写真図版21~79~22~82)

調査区南側355~820G付近に位置する。規模・形状は、北東から南西方向に延びており、緩いS字状に蛇行している。北東側が調査区外に延びるため全長は不明だが、確認した総長は24.5m、上幅は1.1~1.8m、検出面からの深さは約20~25cmを測る。断面形は半円形及び皿状となる。遺構の北部では、底面に複数の木杭が打ち込まれている状況を確認した。この木杭の上側は凹面状に加工されている。この木杭周辺からは端部が凸状に加工された板状木製品が複数出土しており、打ち込まれた杭と組み合わせられた橋が架けられていたと推測される。さらに、打ち込まれた木杭周辺の底面には小縄が多く堆積していた。この遺構が水路として使われていたことを示している。他の遺構との重複関係では、S D 306・307、S K 365より新しい。堆積土は4層確認した。また、

遺構の一部は現代の搅乱を受けている。出土遺物は、須恵器坏13、陶器小壺14、古銭15、橋の部材と考えられる木製品（写真図版21~79~22~82）が出土している。13の須恵器坏は体部のみの破片資料で全体の器形は不明である。外面に叩き目、内面には同心円文當て具痕がみられる。出土状況等から流れ込みと判断される。14の陶器小壺は、ロクロで整形され、全体に鉄輪がかけられており大宝寺焼と考えられる。年代は19世纪代である。15は寛永通宝である。遺構の北側の底面から出土した。写真図版21~79と22~80は上部にはぞ穴、下部は杭状に加工される。写真図版22~81は両端にはぞが作出され、写真図版22~82は板状に加工される。樹種は全て針葉樹である。出土した寛永通宝からこの溝跡は江戸時代に使われたと考えられる。これらの他にも古代・近現代の遺物が多数出土したが、小破片のため図示できなかった。

**S D 307溝跡** (第20図、25図16~17)

調査区南側360~825G付近に位置する。規模・形状は、東西方向に延びており、途中わずかに屈曲する。全長30.6m、上幅1.3~2.3m、下幅55cm~2.2m、検出面からの深さは約10cmを測る。東側は堆積土がかなり浅くなっている。後世に大きく削平されたと考えられる。断面形は皿状となっている。遺構の西側では20~38cm程度のピット状の落込みが確認された。また現代の搅乱も受けている。他の遺構との重複関係は、S D 305・306よりも古く、S D 287より新しい。堆積土は1層確認した。出土遺物は、須恵器坏16、土師器坏17が出土している。16の須恵器坏は、遺構の東側で発見されており、堆積土中から出土している。底部には回転糸切りの痕跡がみられ、口縁部は外反している。9世紀中頃~後半と考えられる。17の土師器坏は全体が磨滅しており、器面調整や成形方法などは不明である。この他にも、検出段階で土師器・須恵器片が出土しており、遺構中に多くの遺物が埋まっていると予想された。しかし、堆積土が10cm程度と浅く、出土した遺物は小破片のため図示できなかった。

**S D 319溝跡** (第18図)

調査区南側355~840G付近に位置する。規模・形状は、東西方向に延びており、全長22m、上幅48~62cm、下幅31~43cm、深さは約6cmを測る。断面形は逆台形を呈する。また、一部に現代の搅乱を受ける。堆積土は1層確認した。遺物は、須恵器片や木製品が堆積土中か

### III 遺構と遺物

ら出土したが、小破片のため図示できなかった。

#### S D140水路跡（第22～24図）

調査区中央部305～325～820～875G付近に位置する。規模・形状は、東西方向に延びており、両端はいずれも調査区外へと続く。調査区内で確認した総長は60.9m、上幅1.8～5.3m、下幅98cm～2.0m、検出面からの深さは約43cmを測る。他の遺構との重複関係では、SK143・144・145、SD141より新しく、遺構検出段階で多数見つかった暗渠跡は、このSD140を中心に埋設されている。SD140は、現在作付けされている耕地が整備されるまで使われていた水路と推測される。堆積土は、4層確認した。人為的に埋められている。SD141と東側では並行しており、さらに出土した遺物などから、SD141を埋め、より直線的な新水路として掘られたものと考えられる。遺物は多種、多様のものが数多く出土している。そこで、古代に属する須恵器や土師器もわずかにみられるが、検出面付近からの出土であり、流れ込みと判断できる。堆積土中や遺構の底面からは、陶磁器類のほかに、ガラス製品やプラスチック製の容器、金属製品、木製品など近代の遺物が数多く出土している。

#### S D141水路跡（第22～24図、25図18～27図41、写真図版22～86）

調査区中央部315～820～870G付近に位置する。規模・形状は、東西方向に延び、両端は調査区外へ延びる。中央部で緩やかに屈曲する。調査区内で確認した総長は53.8m、上幅2.8～3.8m、下幅60cm～1.8m、検出面からの深さ約43cmを測る。他の遺構との重複関係は、SK143・144・145・150、SD142、SP134より新しくSD140より古い。堆積土は7層確認した。人為的に埋められている。出土遺物は、須恵器、土師器、陶磁器、金属製品、木製品など数多く出土した。その中から24点を抽出し図示した。18・19の須恵器は1層からの出土で、SD141が廃棄され埋められる過程で他の遺構から流れ込み、2次的に埋まつたと考えられる。これ以外の遺物はいずれも近世以降のものであり、SD141の存続年代をあらわしているといえる。18は須恵器壺または、瓶類で、体部下側はヘラ削り調整が施されている。体部上側と口縁部が欠損しているため正確な器形は不明であるが、胴部の直径や立ち上がりなどから長頸瓶の可能性が高い。19は須恵器壺の体部で、外面に格子状の叩き目、

内面には並行の当て具痕がみられる。20は土師質の製品で、外面上には叩き目のような文様がみられる。古代の土師器壺とも考えられるが、器種や詳細は、破片資料であるため不明である。21～41はすべて近代以降に属する遺物である。21・22は19世紀代の端反碗である。23は18～19世紀の陶器碗で、高台部と体部の下側には釉がかからない。文様や胎土から、山形県内あるいは東北地方の窯で焼かれた磁器と考えられる。24・25は波佐見産の碗である。24は磁器碗で、18世紀～19世紀の製品である。25は18世紀代に作られた陶器碗である。26は肥前磁器皿で、19世紀前半の製品である。外面・見込み共に絵付けが施されている。27・28・30は波佐見産の磁器皿である。27は18世紀、28・30は19世紀中頃の製品と考えられる。29は18世紀代の肥前陶器皿である。31・32は肥前磁器皿である。31は17世紀末～18世紀初頭、32は18世紀代の製品で、いずれにも草花文が描かれている。33・34は肥前陶器の皿で、33の内面と高台内側には焼成の際に付着した砂がみられる。18世紀頃の製品である。34は口縁部から体部上半に釉がかけられた皿で、16世紀末～17世紀初頭に焼かれた製品である。35は肥前磁器半筒碗である。18世紀の製品である。36は产地不明の小壺で、釉薬等から19世紀代に鶴岡で焼かれた大宝寺焼の可能性が高い。37・38は大宝寺焼の陶器鉢で、19世紀に焼かれた製品である。37の口縁部には海鼠釉がかけられている。39は肥前陶器壺の口縁部である。40は肥前陶器の徳利である。頭部内面には、成形時に頭を絞り込んだ痕跡がみられる。39・40は19世紀の製品である。41は大宝寺焼の湯通である。体部の上半部や口縁部は欠損しているが、形態は甕に似ており、底面に多くの施孔があけられている。また体部外面には鉄釉がかけられる。また、木製品では写真図版22～86の裏面彫り抜きの舟形下駄が出土している。図示した21～31は、20世紀以前のものと思われる遺物の中から、特長的な器種や比較的残りが良く全体の器形が分かるものである。これらの陶磁器から、18世紀～19世紀にかけての肥前系陶器・磁器や波佐見産の磁器などが多く流通していた様子が窺える。19世紀以降には庄内で焼かれた大宝寺焼も日常雑器として使われている。また図示しなかったが、明治以降の製品には、瀬戸産の陶磁器も多くみられた。少ない出土量ではあるが、SD141出土遺物から、近世後半頃に庄内で、どのよう

な陶磁器が流通・消費していたのかを垣間見ることができる。

#### 遺構外出土遺物（第27図42～29図77）

遺構外からは、古代の須恵器・土師器・中世陶器・近現代の陶磁器や木製品・金属製品など様々な遺物が出土している。その中から、器形が復元できるものや特徴的なものなど、古代の土器を中心として抽出し図示した。

42は須恵器蓋で、今回の調査で明確に須恵器蓋と認識できた遺物はこの1点のみである。天井中央部が欠損しているが、つまみが貼り付けられていたと考えられる。9と組み合わせて使用された蓋と考えられる。43は須恵器高台付坏である。回転糸切りによってロクロから切り離し、その後高台を張り付けている。44も43と同じ須恵器高台付坏である。44は、底部切り離し技法は不明であるが、体部外面下側にケズリ調整が施されている。45は須恵器小壺と考えられる。底部径が小さく、また器壁も厚く作られている。直立気味に立ち上がる体部は、壺というよりは小型の壺と考えるのが妥当であろう。46～55は須恵器坏である。47は底部が残存していないが、高台の付かない壺と考えられる。49～55の須恵器坏は、いずれも口縁部は欠損しているが底部に回転糸切りの痕跡がみられるものである。54は底部に墨書きがみられる。底部の大半が欠損しており墨書きされた字体は識別できないが、今回の調査で出土した唯一の墨書き土器である。56は須恵器の小型短頸壺である。体部下側は欠損しているが、あまり肩が張らないタイプのものである。57～63は須恵器壺である。57は須恵器壺の口縁部分のみであり、また破片資料のため口径は不明である。このタイプの口縁部は、壺だけではなく、同時代の肩が張らない鍋にもみられる形態であり、大型の丸底鍋の可能性もある。58～63は頭部や体部が残存しており、叩き目と当て具痕がみられる。58は須恵器壺の肩部である。外面に並行の叩き目、内面に当て具痕がみられる。59は須恵器壺の頭部～体部である。58とは内外面の叩き目・当て具痕が異なり、59では格子状叩き目と同心円文当て具痕がみられる。62の外面には自然釉がかかり濃緑色を呈している。今回出土した壺の体部を観察すると、数種類の叩き目・当て具痕がみられた。60は58と、また62は59同一の工具を用いて器面調整が行われたと推測される。しかし須恵器壺はいずれも破片資料であり、全体の器形が分かる

ものはない。64は須恵器瓶で、体部～肩部の部分である。器壁が厚くロクロ成形によって作られており、また肩の張りなどから長頸の瓶であると思われる。しかし頭部や口縁部が残存していないため断定はできない。66は、珠洲系陶器の壺もしくは大型壺である。今回の調査で中世の陶器として明確に認識されたものはこの1点だけである。この66は13世紀～14世紀の製品と考えられる。67～71は土師器坏である。このうち、67・71は非ロクロ成形であり、68・70はロクロによって成形された土師器坏である。69は全体が磨滅しており、成形方法や調整技法などは不明である。67も全体的にやや磨滅しているが、内外面でミガキ調整がみられる。この坏は他の土師器に比へ器厚が非常に薄く、作りも丁寧である。そのため古代の製品ではなく、古墳時代の土師器の可能性もある。68は底部に回転ヘラ削りの痕跡が確認できた。70では底部に回転糸切りの痕跡が残る。71は器壁が磨滅しているが、外面ではミガキ調整が確認できた。土師器坏は、図示したもののはかにも多数小破片が出土している。しかしそれらは磨滅が著しく、明確な時代や時期は不明である。72は土師器壺で、ロクロによって成形されている。体部の大半が欠損しており、器高や底径などは分からぬが、口径や器厚の薄さから小型の壺と考えられる。73は素焼きの鉢で、焼成も比較的良く、一見土師器のように見えるが、近現代に焼かれた素焼きの鉢とするのが妥当であろう。器厚は1.0cmと厚い。74は近代の瓦である。正確な大きさは不明だが、鶴岡市の鶴ヶ岡城で江戸時代に使用された瓦と同一のものである。鶴ヶ岡城の瓦は、この74以外にも破片資料ではあるが何点か出土している。いずれの瓦も赤瓦である。鶴ヶ岡城では、文政3年（1820）以降從来の黒瓦ではなく破損にくい赤瓦を使用するようになったという記録が残されており、これらの瓦は文政年間以降に焼かれ、その後、廢城となった明治以降に転用するため運ばれた可能性が高い。75は表採された肥前磁器の皿である。制作された時代は17世紀前半頃で、初期伊万里とも称される磁器である。76・77は古銭で表土除去直前に発見された表採資料である。磨滅が著しいが、76は寛永通宝と思われ、77の銭銘は不明である。

## IV 理化学的分析

### 木製品の樹種調査結果

㈱吉田生物研究所

#### A 試 料

試料は出土した服飾具1点、容器1点、建築部材5点、用途不明品3点の合計10点である。

#### B 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

#### C 結 果

樹種同定結果（針葉樹4種、広葉樹1種）を表2と木材の顕微鏡写真（写真図版21）を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

##### 1) マツ科ツガ属 (*Tsuga* sp.)

(No. 5、写真No. 5)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔はスギ型、ヒノキ型で1分野に2~4個ある。細胞壁には数珠状末端壁がある。上下両端には放射仮道管がある。板目では放射組織はすべて単列であった。ツガ属はツガ、コメツガがあり、本州、四国、九州に分布する。

##### 2) マツ科マツ属[二葉松類] (*Pinus* sp.)

(No. 6、写真No. 6)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が細胞間隙としてみられる。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で1~15細胞高のものと、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。マツ属[二葉松類]はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

##### 3) スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D.Don)

(No. 9、写真No. 9)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1~3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

##### 4) ヒノキ科アスナロ属 (*Thujopsis* sp.)

(No. 1~4・8、写真No. 1~4・8)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2~4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

##### 5) ブナ科ブナ属 (*Fagus* sp.)

(No. 7・10、写真No. 7・10)

散孔材である。木口ではやや小さい道管（~110 μm）がほぼ平等に散在する。年輪の内側から外側に向かって大きさおよび数の減少が見られる配列をする。放射組織には単列のもの、2~3列のもの、非常に列数の広いものがある。柾目では道管は單穿孔と階段穿孔を持ち、内部には充填物（チロース）が見られる。放射組織は大体平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型のレンズ状の壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、2~3列、広放射組織の3種類がある。広放射組織は肉眼でも1~3 mmの高さを持った褐色の紡錘形の斑点としてはっきりと見られる。ブナ属はブナ、イヌブナがあり、北海道（南部）、本州、四国、九州に分布する。

## 参考文献

- 島地 謙・伊東隆夫 1988 「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版  
 島地 謙・伊東隆夫 1982 「図説木材組織」 地球社  
 伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～V」京都大学木質研究所  
 北村四郎・村田 源 1979 「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社  
 深澤和三 1997 「樹体の解剖」海青社  
 奈良国立文化財研究所 1985 「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」  
 奈良国立文化財研究所 1993 「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」

使用顕微鏡：Nikon DS-Fil

表2 木製品同定表

No.	写真図版	番号	品 名	樹 種
1	21	78	建築部材	ヒノキ科アスナロ属
2	21	79	橋の脚部	ヒノキ科アスナロ属
3	22	80	橋の脚部	ヒノキ科アスナロ属
4	22	81	橋の脚部	ヒノキ科アスナロ属
5	22	82	橋の部材	マツ科ツガ属
6	22	83	杭状木製品	マツ科マツ属 [二葉松類]
7	22	84	杭状木製品	ブナ科ブナ属
8	22	85	板	ヒノキ科アスナロ属
9	22	86	下駄	スギ科スギ属スギ
10	22	87	漆器片	ブナ科ブナ属

## V 調査のまとめ

今回の調査は、地域高規格道路新庄酒田道路の一部を構成する「余目酒田道路」の建設事業に伴う、南口A遺跡の発掘調査である。調査によって得られた成果を以下に述べる。

南口A遺跡は、山形県東田川郡庄内町余目字南口に所在し、余目駅から南西約2kmの地点に位置する。水田地帯に立地し、標高は約7mを測る。遺跡の北側を県道43号余目加茂線が走る。発掘調査は、事業実施地区のうち遺跡にかかる約6,500m<sup>2</sup>を対象に実施した。

遺跡からは、奈良・平安時代・近世・近代と考えられる遺構が検出され、遺物は古代の土器や近世・近代の陶磁器、古錢、木製品などが出土した。但し、調査区全体が削平や搅乱を受けているため遺構、遺物ともに保存状態は良くない状況である。

古代の遺構に属すると考えられるのはS T252堅穴建物跡、S K13・79・284・289・292・317・318・354土坑、S P82・83ピット、S D275・287・307・319溝跡などが挙げられる。

S T252は上部が削平され、カマドや柱穴などの内部施設が検出されず、掘り方のみ残存し、遺物も出土していないが、覆土や形態、規模などから奈良・平安時代の堅穴建物跡と考えられる。古墳時代に遡る可能性もあるが、明確な古墳時代の遺物が調査区から出土していないことから、そう考えられる。

土坑、ピット、溝跡も削平を受け、保存状態が悪く、深さも浅いが、覆土中や底面から奈良・平安時代の遺物が出土している。土坑や溝跡は調査区南側の355～365・835～850G近辺に集中している傾向が認められ、古代の土器分布と同様である。

遺物は須恵器、黒色土器、土師器などがあるが、大半が破片資料であった。器種には供耕形態の蓋、壺、台付碗、高台付壺と貯蔵形態の壺、甕などがあるが、須恵器の壺類が多く、墨書き土器1点が含まれる。但し、欠損しているために、墨書きの字体は不明である。土器の所属時期は、底部の切り離しや器形などの特徴から9世紀第2四半期から後半の範疇のものが多くみられるが、SK

79出土の壺（2）やS P82出土の台付碗（9）、グリッド出土の蓋（42）など8世紀末から9世紀初頭に属するものもある。このことから、古代の集落は、8世紀末から9世紀後半まで営まれていたと考えられ、主たる時期は9世紀第3四半期から第4四半期と推測される。周辺には、同時代の遺跡と考えられている払田遺跡や南口B遺跡、そして、昭和49年の調査で9～11世紀代の須恵器や土師器が出土している梵天塚墳墓があることから本遺跡との関連が窺われる。

但し、今回の調査区では明確な堅穴住居跡や掘立柱建物跡が確認されなかった。これは、今調査区の古代の遺構と遺物の集中域の分布状況から、集落の中心は今調査区外の南東側の未調査区部分にあると考えられる。

近世・近代の遺構は、堆積土の様子や出土遺物などからS K51・92・184・220～223・273・365土坑、S D305溝跡、S D140・141水路跡などが挙げられる。

S K92・220～222・365は堆積土の状況が類似し、底面に板または棒状の木を敷いていた様子が認められた。樹種はS K220出土の杭状木製品が広葉樹のブナで、他は針葉樹のヒノキとマツであった（第IV章）。建物の柱の沈み込みを防ぐための基礎板とも考えられるが、さらに詳細な検討が必要である。また、S D305からは、橋の部材と考えられる木製品や杭が出土し、江戸時代中期頃の橋の構造の一端を知り得る資料となる。樹種は針葉樹のヒノキやマツが使用されていた。（第IV章）そして、S D140とS D141は、その新旧関係から水の流れをよりスムーズにするために、直線的に水路を作りかえたと推定される。

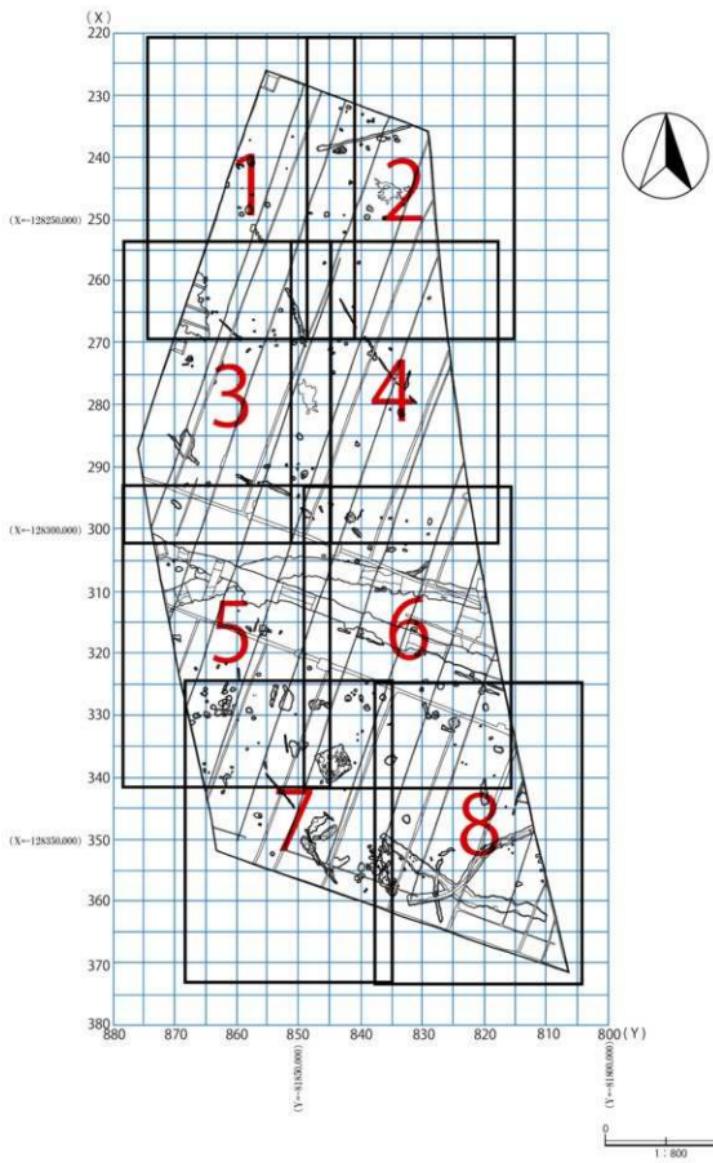
遺物は、前述した木製品の他、16～19世紀の陶器や磁器が出土しているが、18～19世紀代に含まれるものが多くみられる。器種は、碗、皿、甕、鉢、徳利、湯通しなどがある。産地は、在地の大宝寺焼、佐賀県の肥前焼、長崎県の波佐見焼などで、当時の庄内地方における陶磁器の流通・消費の様相が窺える。また、鶴ヶ岡城で使用されていた赤瓦と同一のものが出土したこととは、明治9年（1876年）に鶴ヶ岡城の建物を破却した後に、城

で使用されていた瓦が、この地域にも運ばれて再利用されていたことを物語る資料である。その他、S D140から出土したものに、図示しなかつたが、愛知県の瀬戸焼を含む近代の陶磁器や、現代のガラス製品、プラスチックなどがあり、この水路跡が最近まで使用されていたことが分かる。

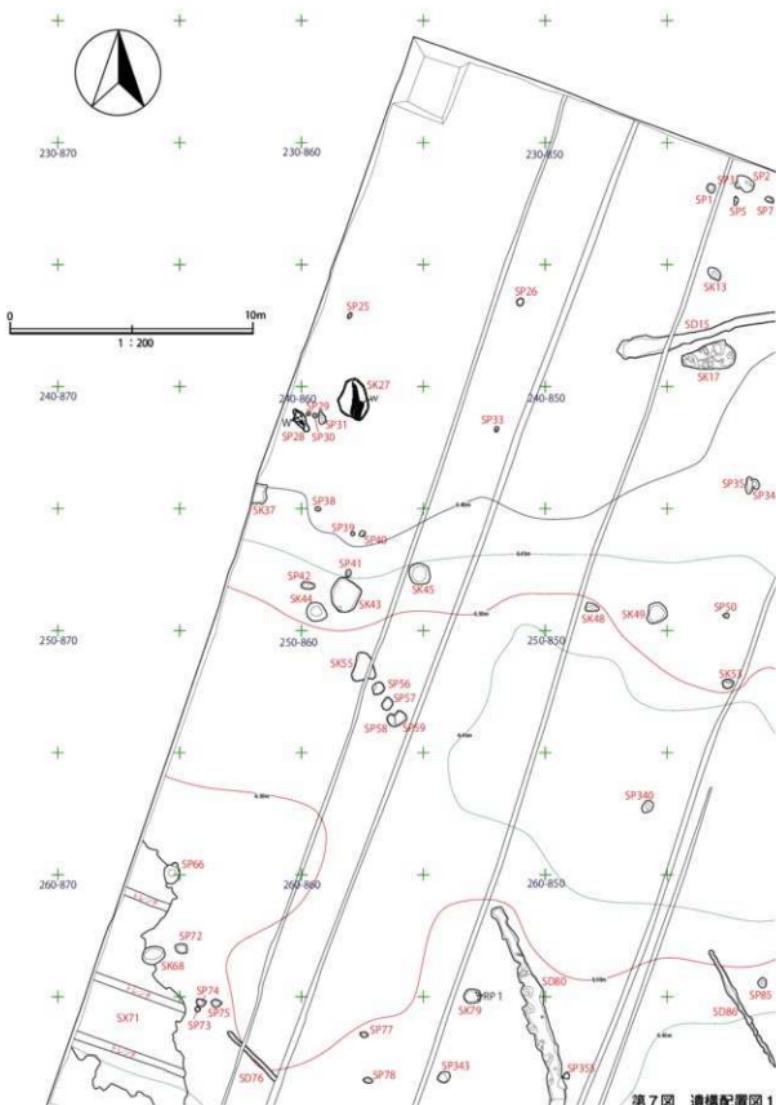
以上から、遺跡は9世紀中～後半を主とした奈良・平安時代と江戸時代中期以降の近世・近代の複合遺跡である。

#### 参考文献

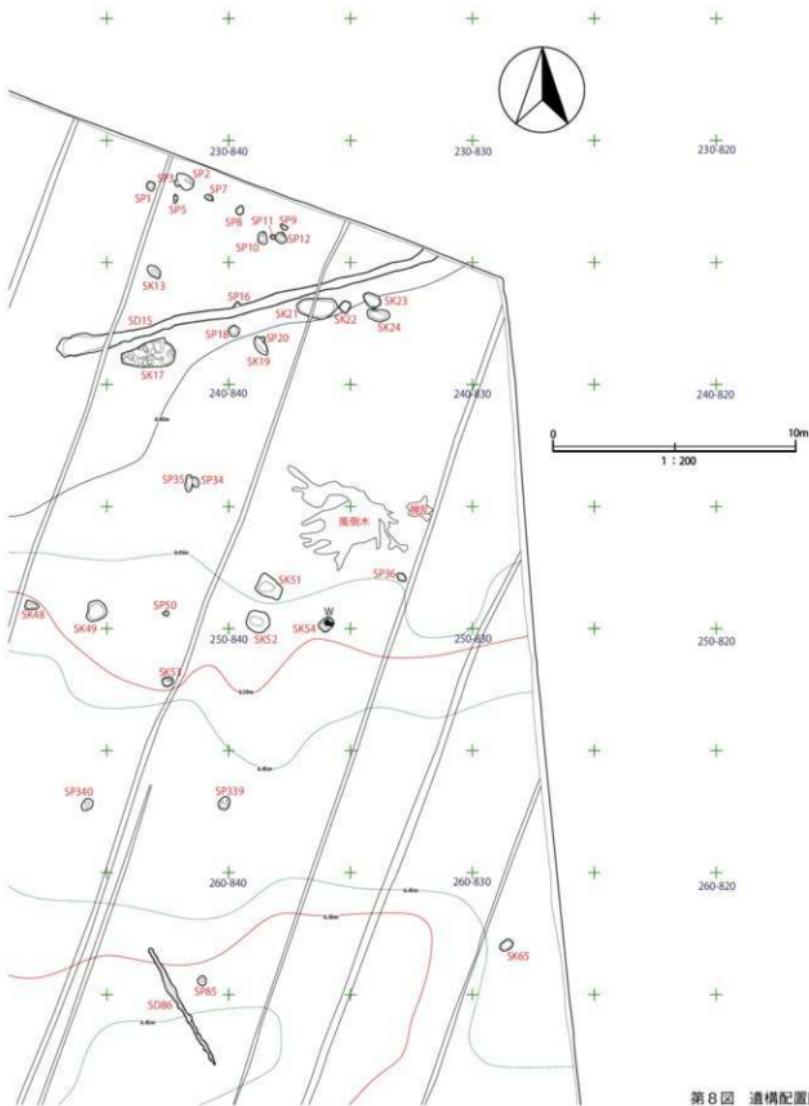
- 余日町教育委員会 1975 「余日町梵天塚遺跡発掘調査報告書」
- 余日町史編纂室 1979 「余日安保氏関係資料」 余日町総務課
- 山形県企画調整部土地対策課 1979 「土地分類基本調査 酒田」 山形県企画調整部土地対策課
- 山形県教育委員会 1984 「千河原遺跡発掘調査報告書」 山形県教育委員会調査報告書第80集
- 吉岡康暢監修 1989 「珠洲の名陶」 珠洲市立珠洲焼資料館
- 菅田慶之ほか 1992 「角川日本地名大辞典6 山形県」 角川書店
- 樋山昭男 1996 「山形県の歴史」 河出書房新社
- 山形県教育委員会 1997 「山形県中世城館遺跡調査報告書第3集(庄内・最上地区)」
- 阿部明彦ほか 1999 「山形県の古代土器編年」 第25回古代城柵官衙遺跡検討会資料』第25回古代城柵官衙遺跡検討会事務局
- 立川町史編纂委員会 2000 「立川町史」 立川町
- 菅原首文 2001 「鶴ヶ岡城跡出土の大宝寺焼」 [庄内考古第21号] 庄内考古学研究会
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2001 「鶴ヶ岡D遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第82集
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2002 「鶴ヶ岡城発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第99集
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2004 「泉森窯跡・坂下遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第129集
- 東北古代土器研究会 2008 「東北古代土器集成 -須恵器・窑跡編-」[出羽] 東北古代土器研究会
- 古代城柵官衙遺跡検討会 2008 「第34回古代城柵官衙遺跡検討会資料集」 古代城柵官衙遺跡検討会
- 利部 修 2008 「出羽の古代土器」 同成社
- 山形県埋蔵文化財センター 2009 「亀ヶ崎城跡4・5次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第180集
- 九州近世陶磁器学会 2009 「第19回九州近世陶磁器学会資料 江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通 関東・東北・北海道編」
- 九州近世陶磁器学会



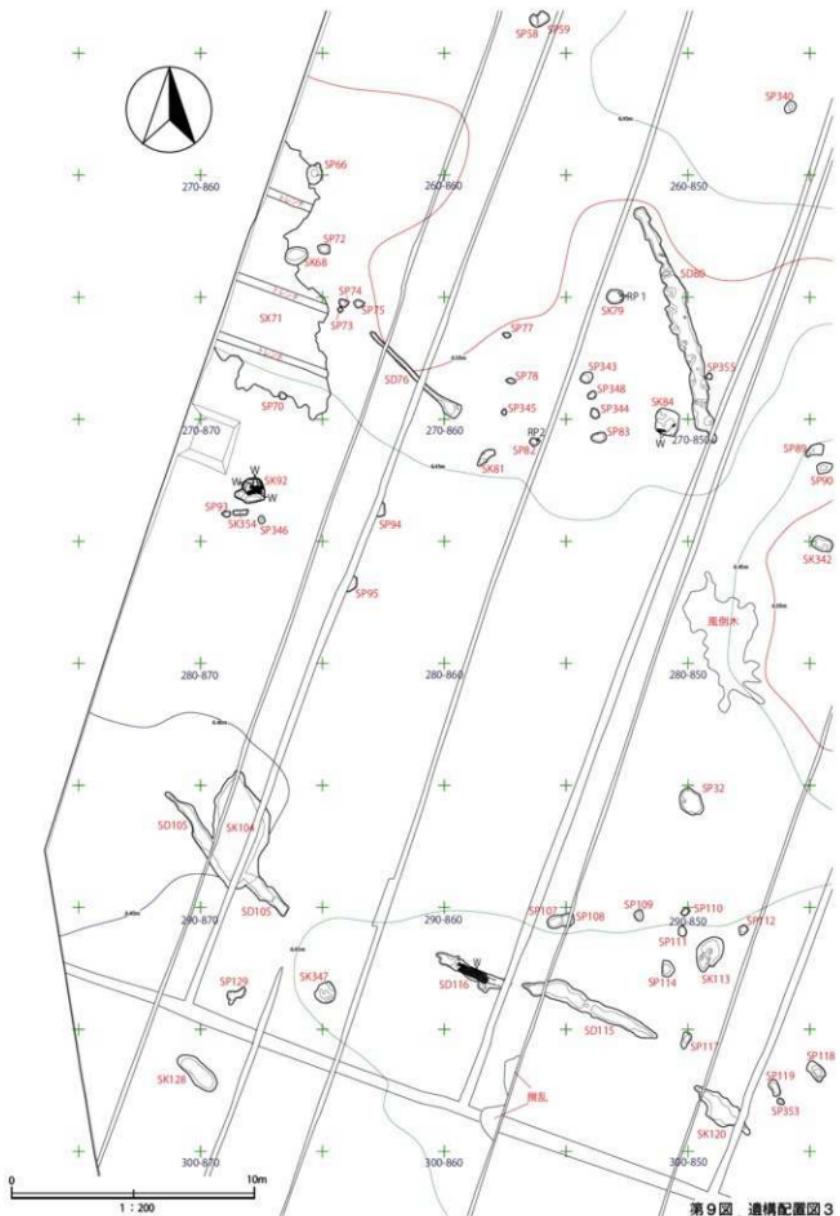
第6図 造構配置図の割付図

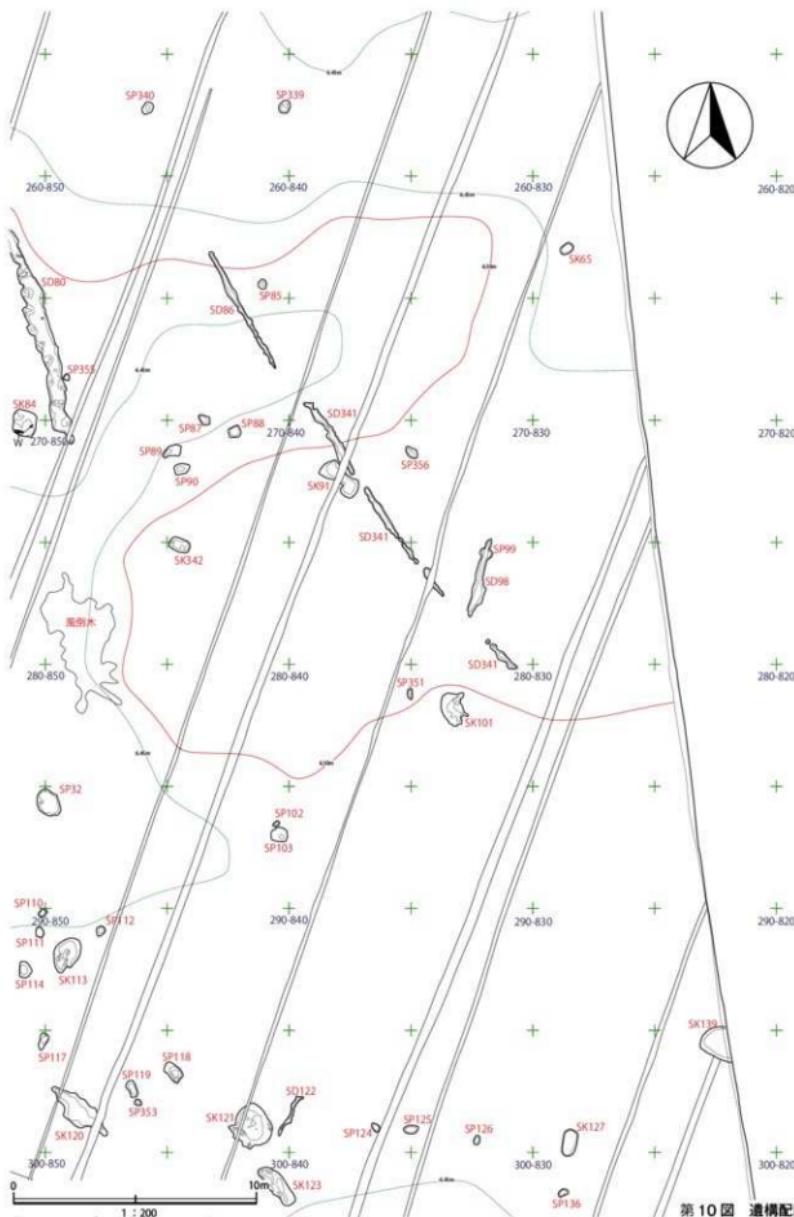


第7図 造構配置図1

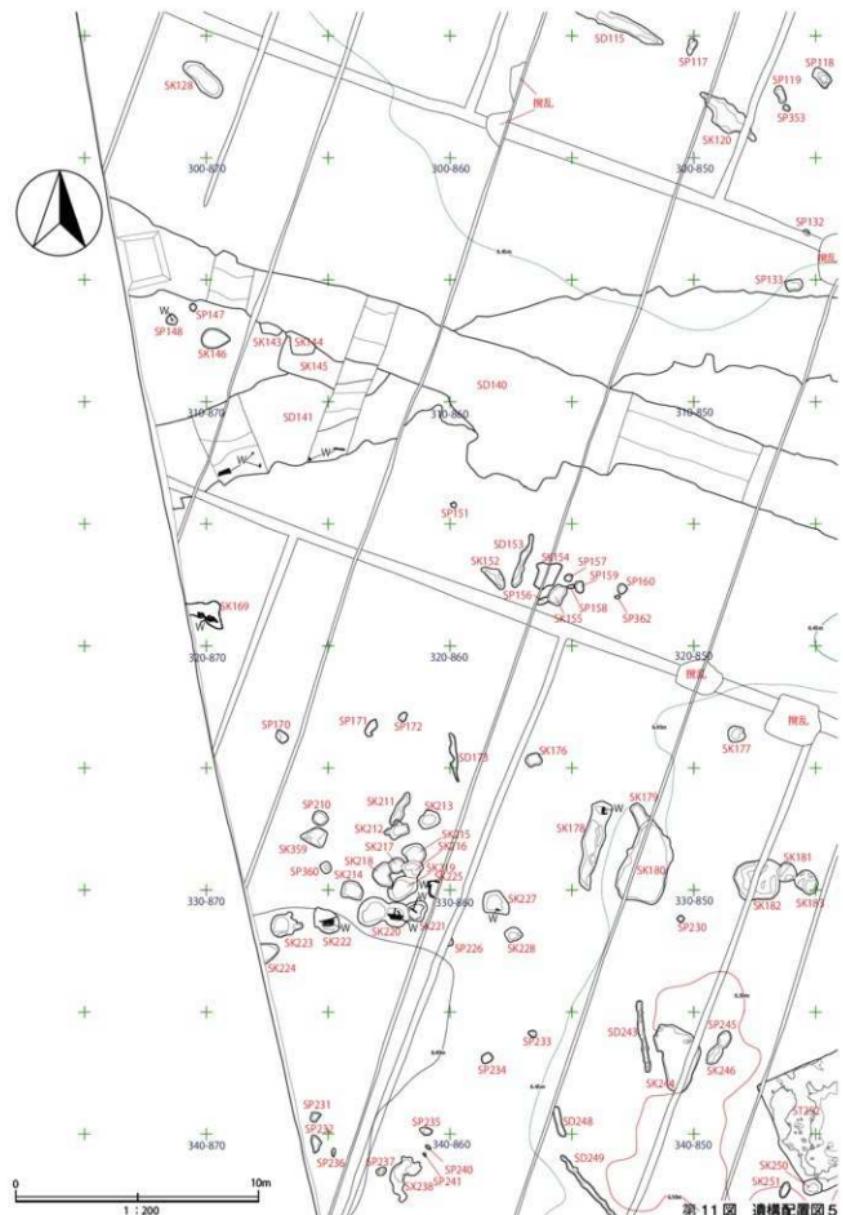


第8図 造構配置図2

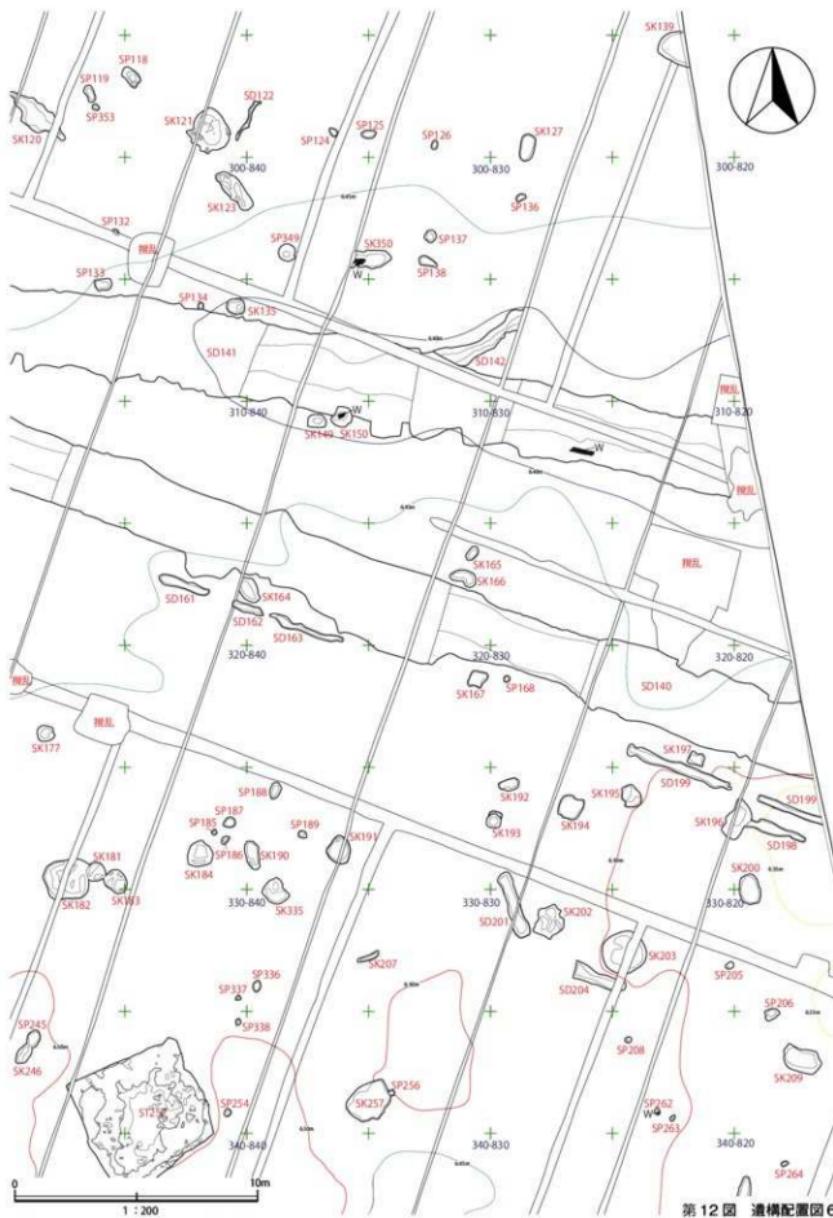




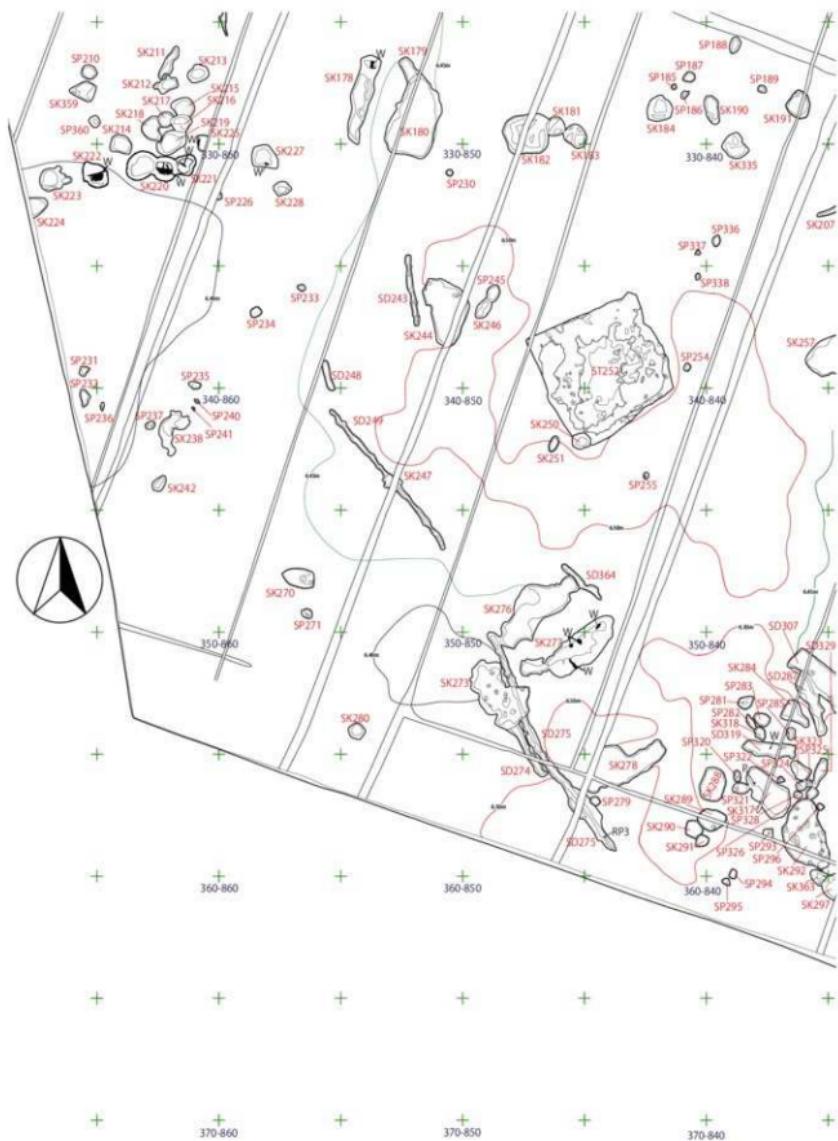
第10図 造構配置図



第11図 造構配置図

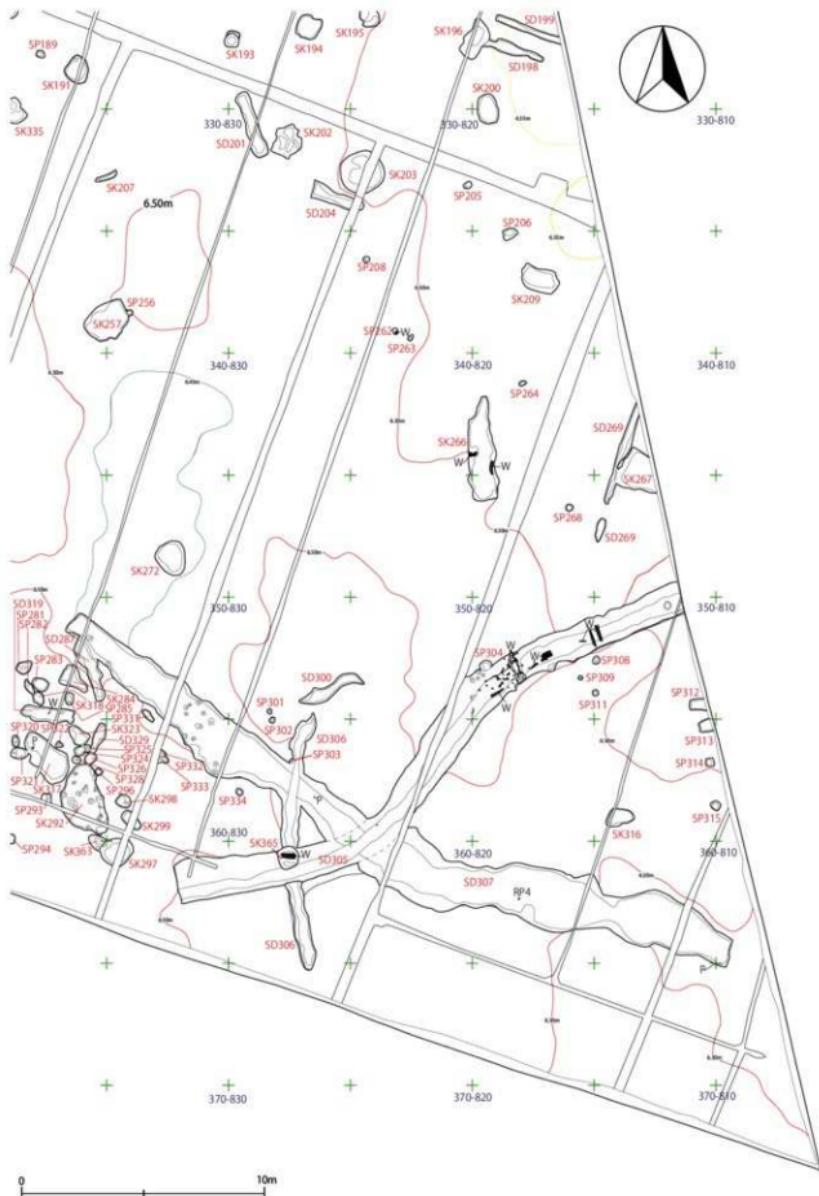


第12図 造構配置図6

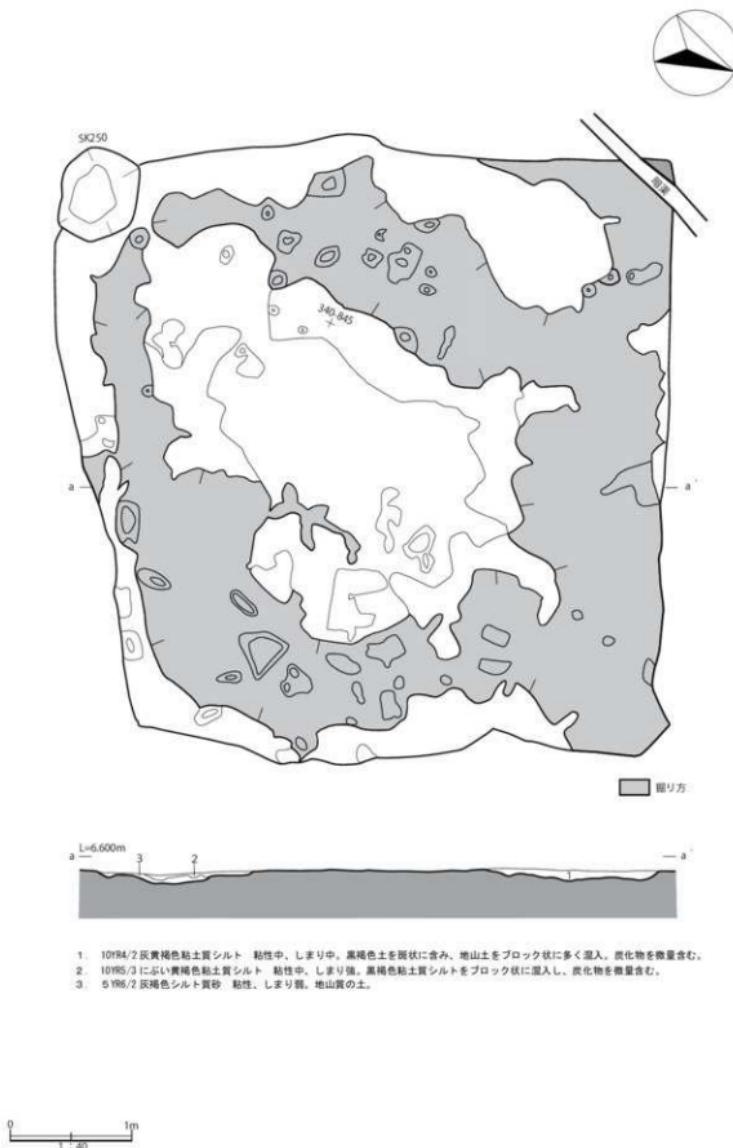


第13図 造構配図

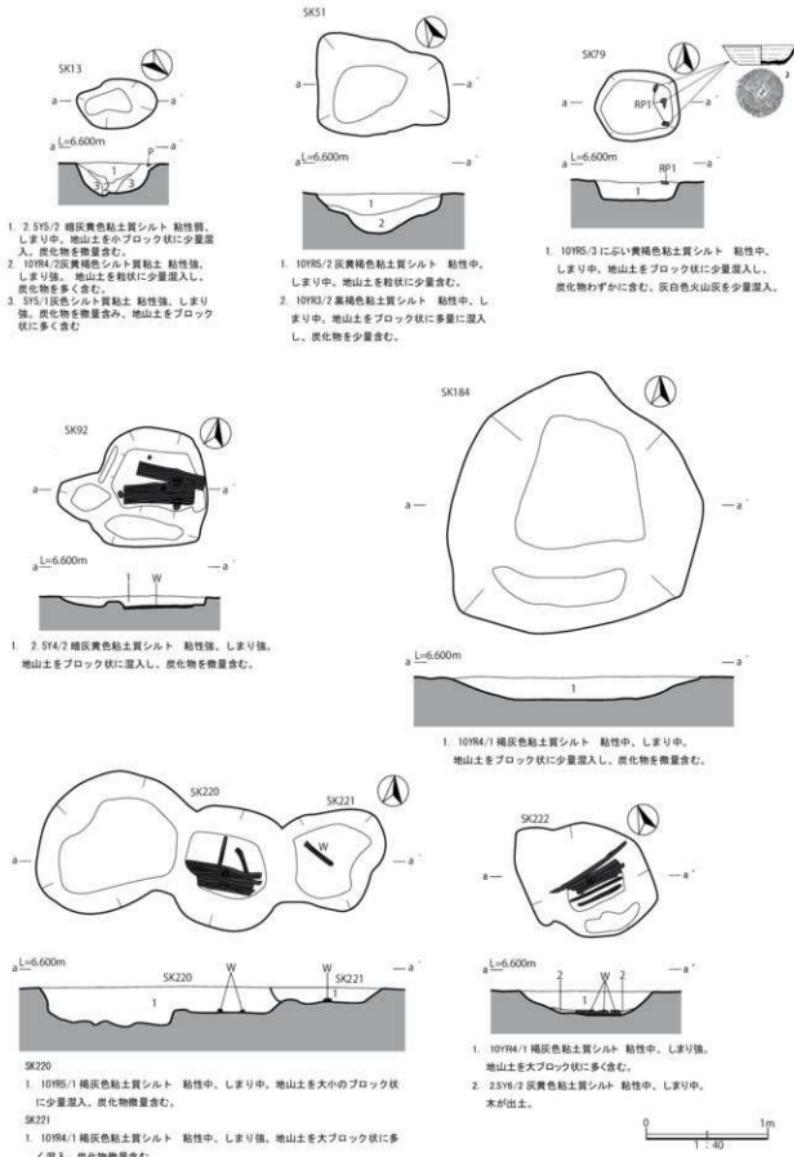
遺傳病測定



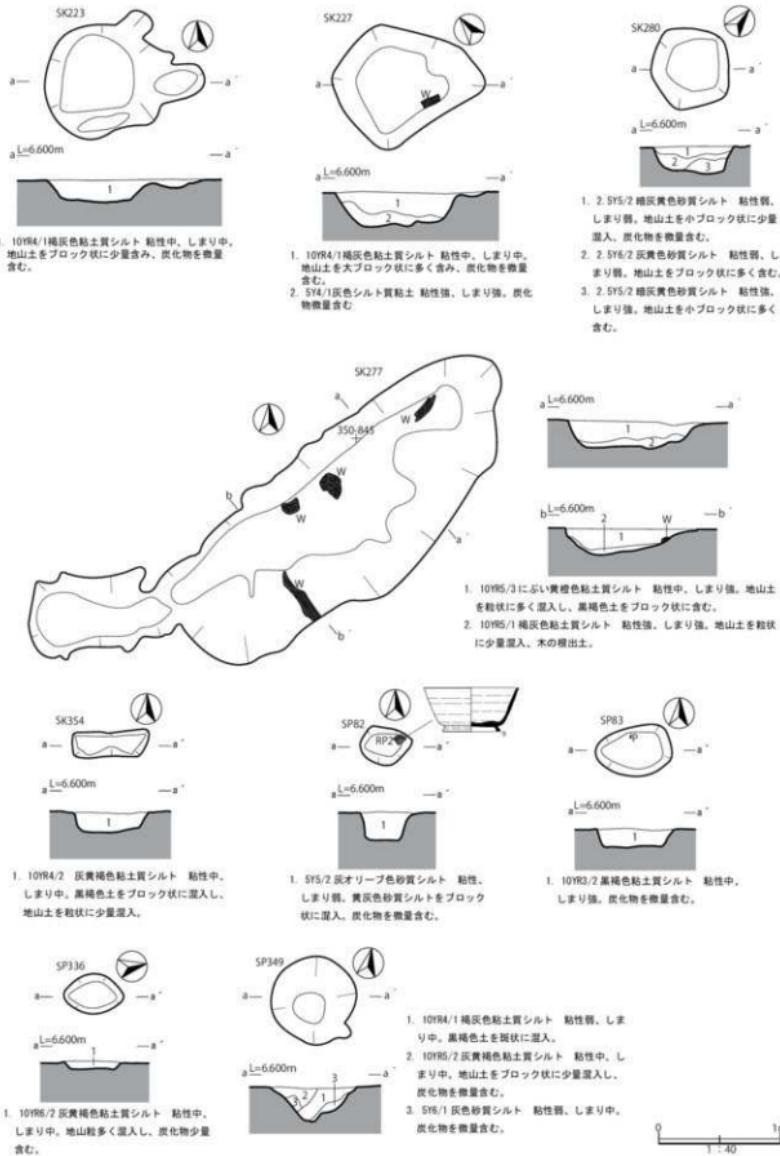
第14図 造構配置図8



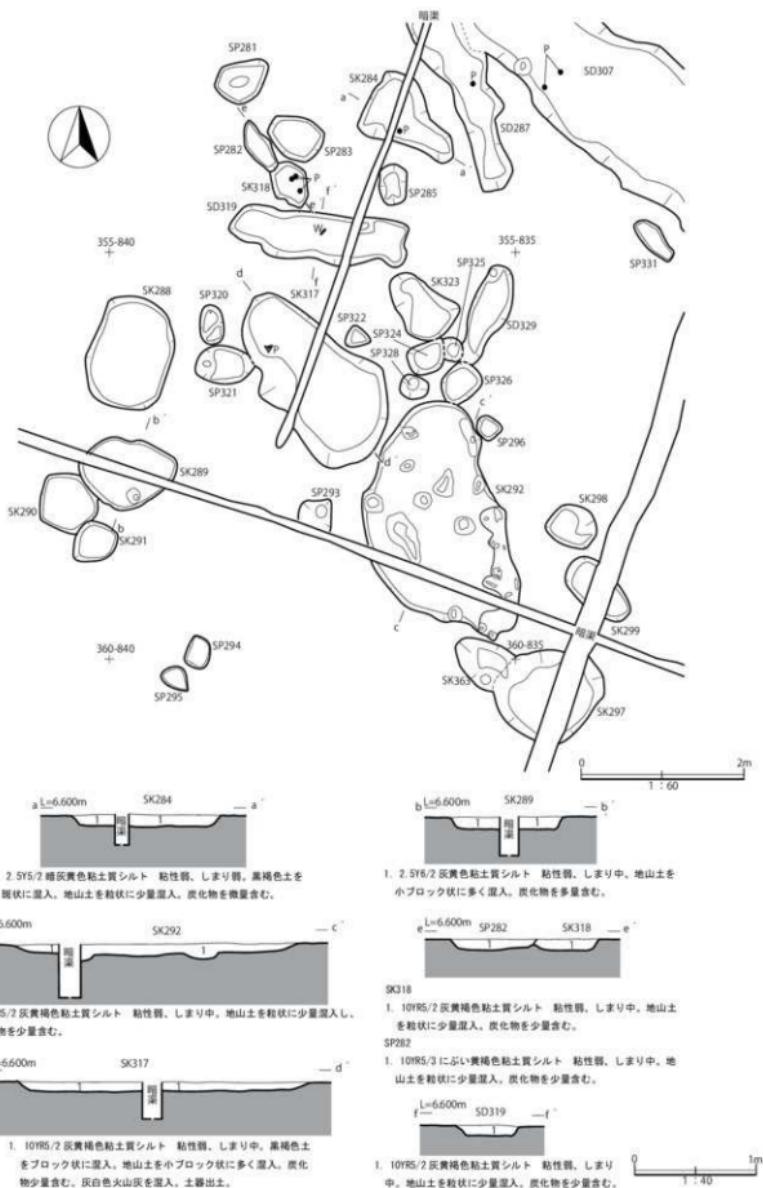
第 15 図 ST 252 壁穴建物跡



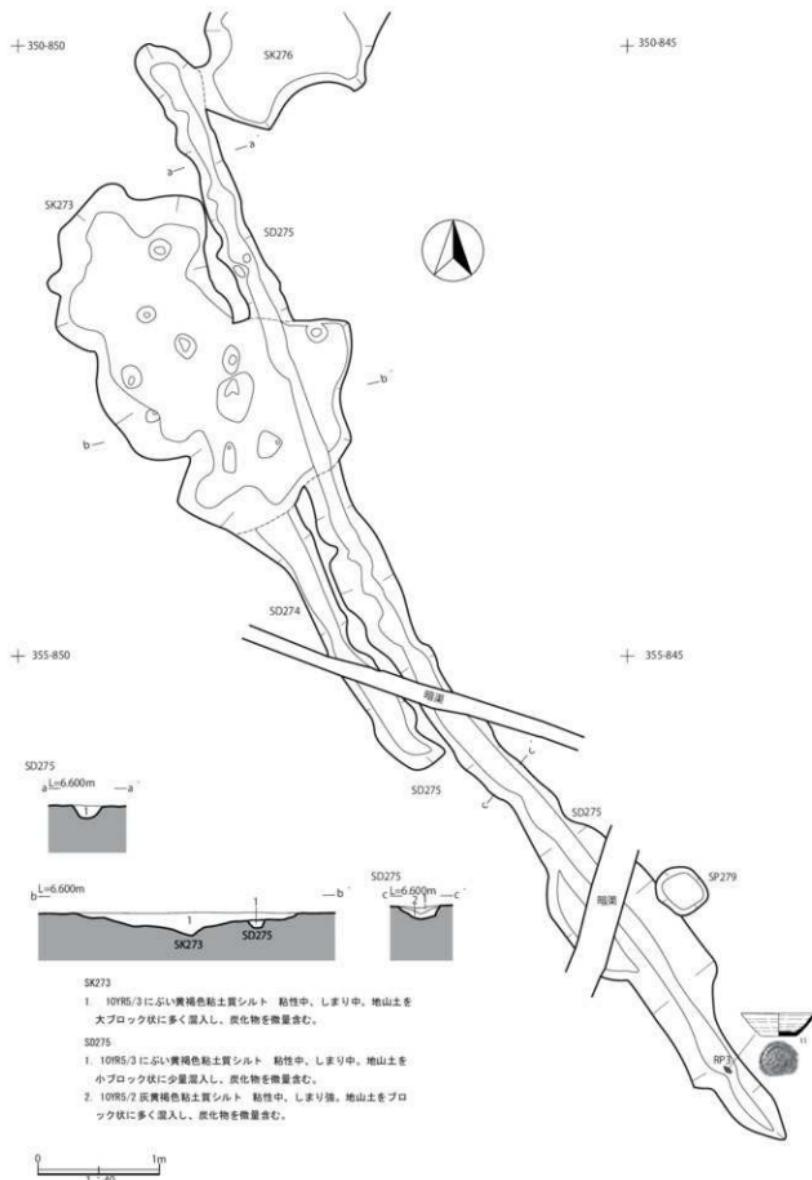
第 16 図 S K 13・51・79・92・184・220・221・222 土坑



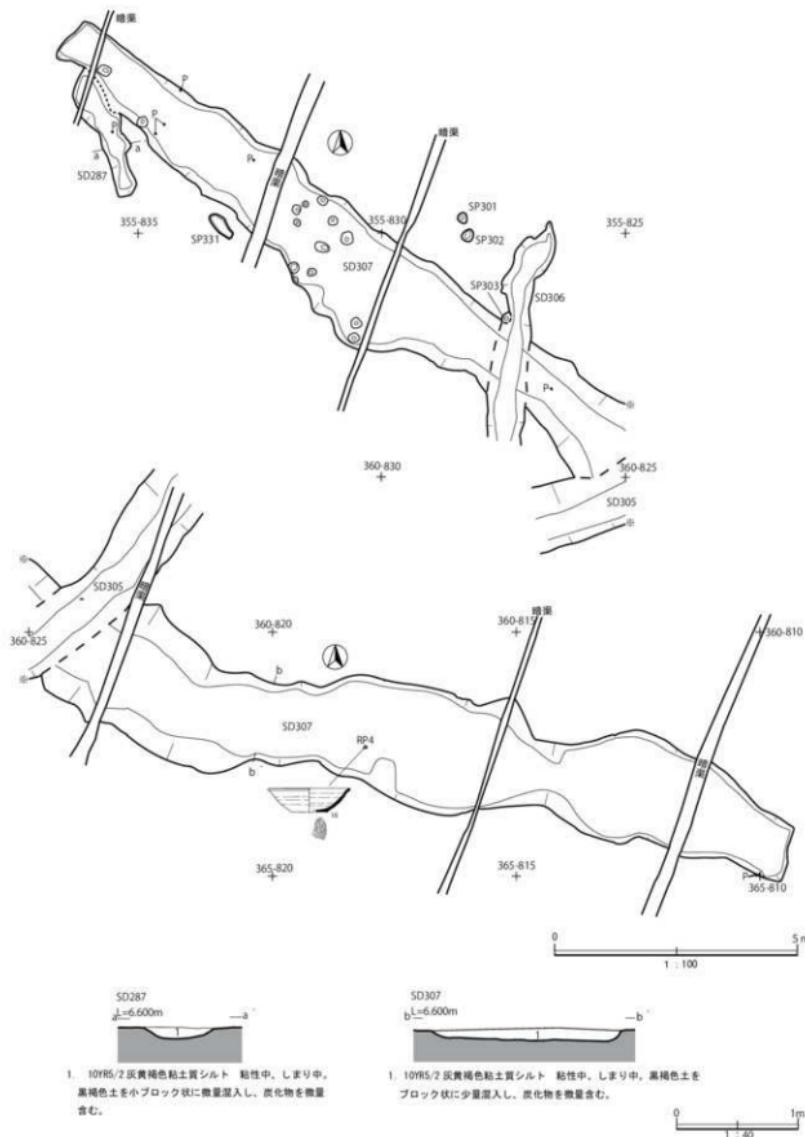
第17図 SK 223・227・277・280・354 土坑、SP 82・83・336・349 ピット



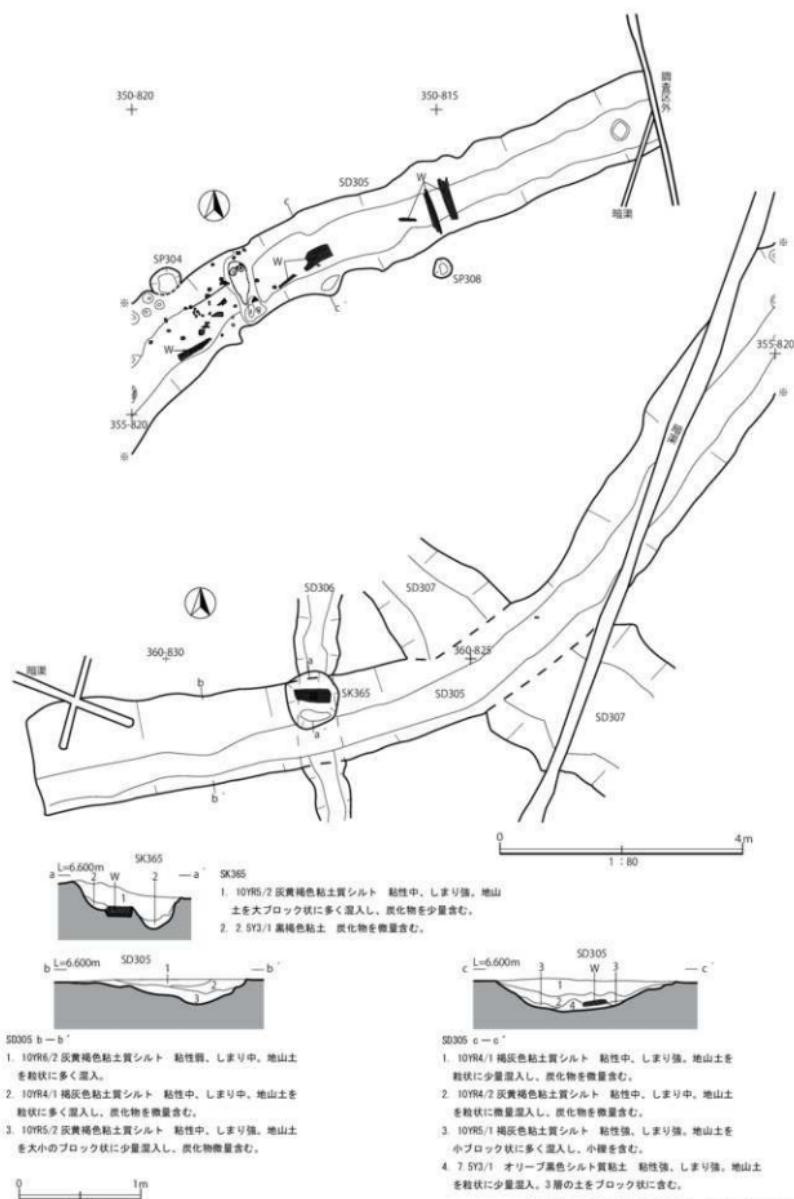
第18図 SK 284・289・292・317・318 土坑、SD 319 溝跡



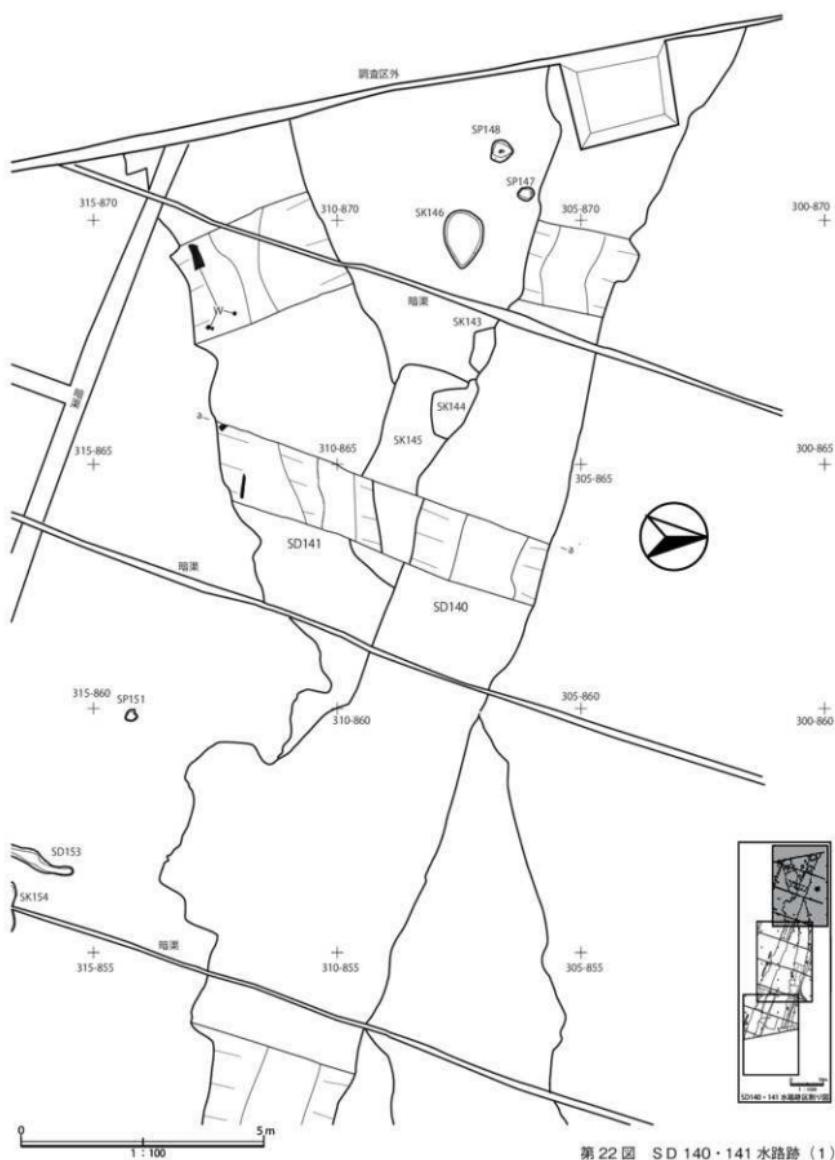
第19図 SK 273 土坑、SD 275 溝跡



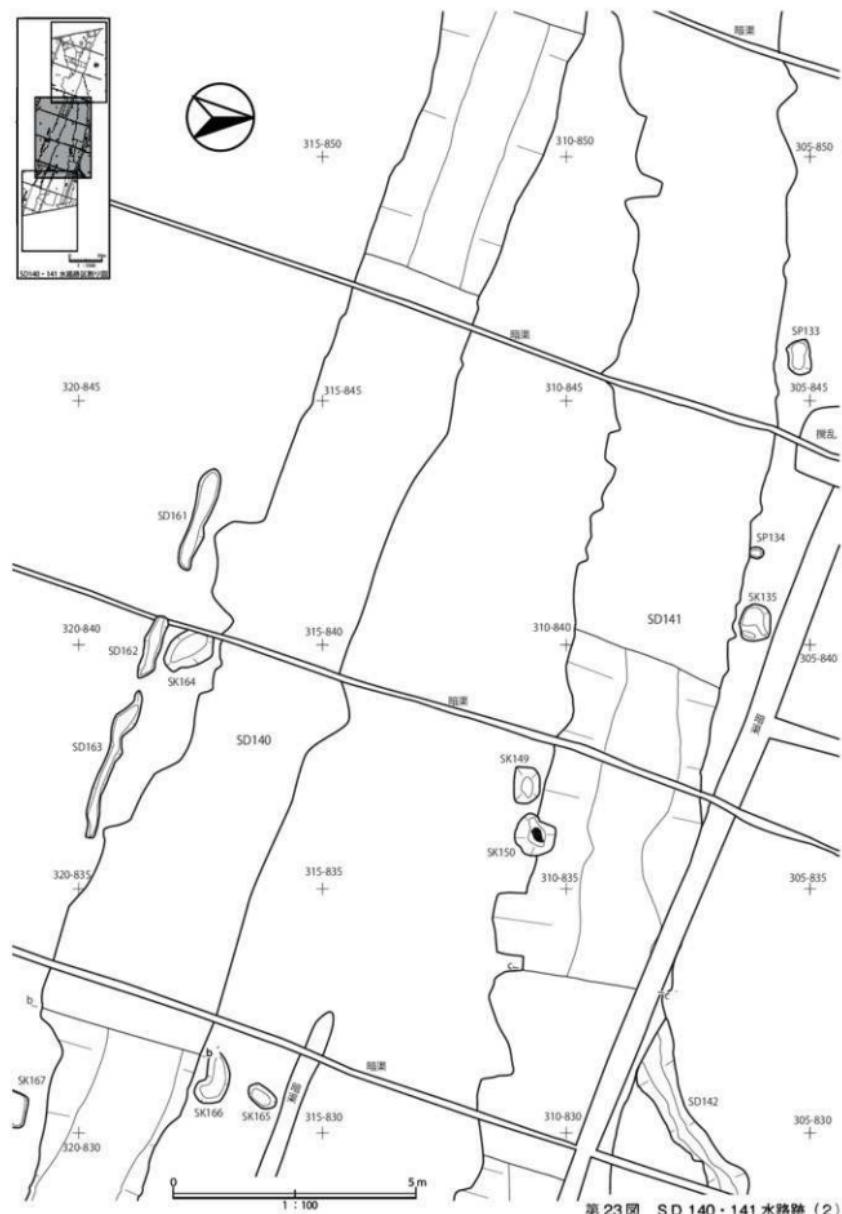
第20図 SD 287・307溝跡



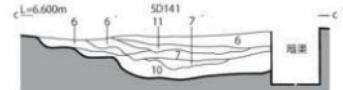
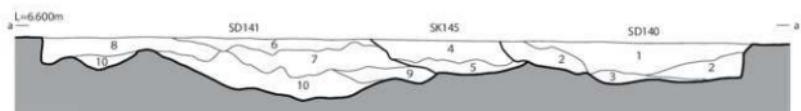
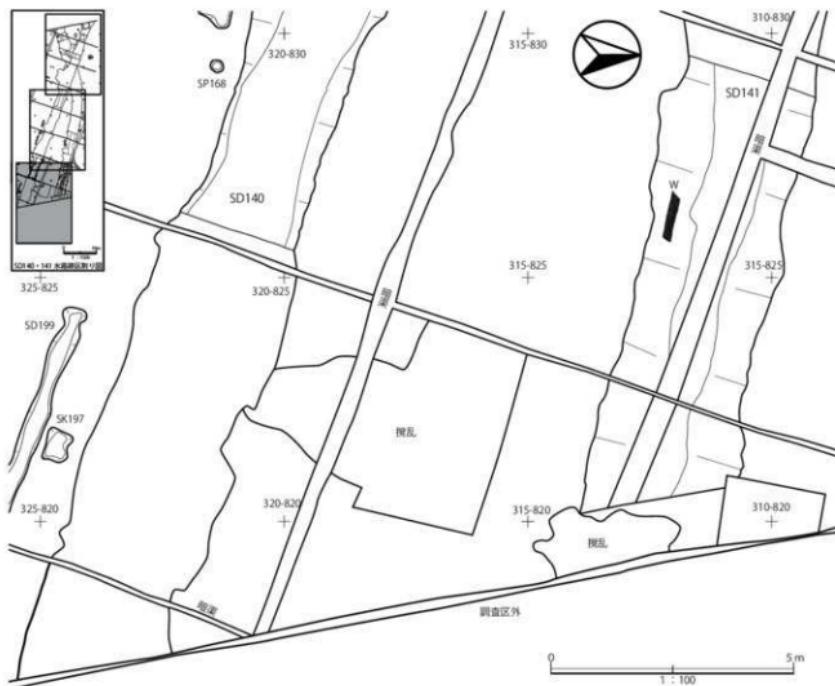
第21図 SK 365 土坑、SD 305溝跡



第22図 SD 140・141 水路跡 (1)



第23図 SD 140・141 水路跡 (2)



SD140

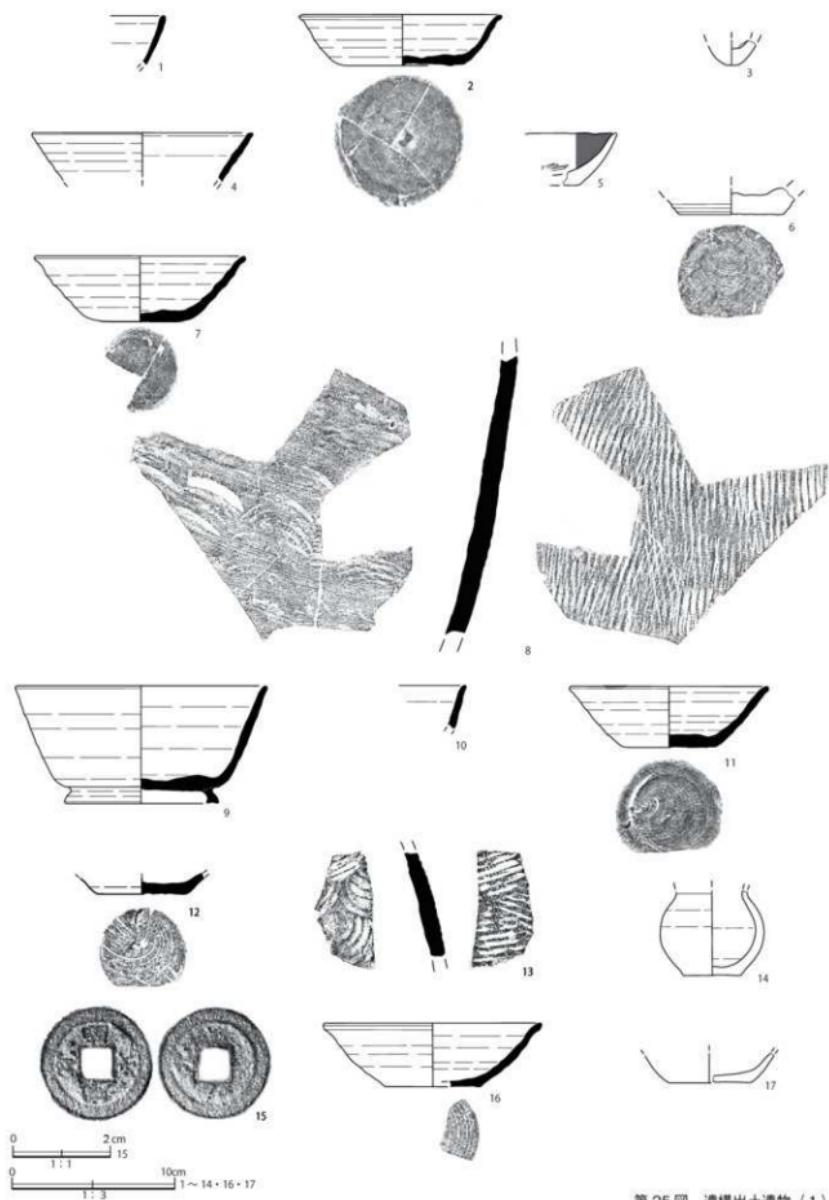
1. 10YR6/3 暗灰色粘土質シルト 粘性中。しまり中。地山土を大ブロック状に少量混入。砂を微量混入。
2. 2.50Y4/1 緑オリーブ灰色シルト質粘土 粘性。しまり強。炭化物を微量含む。小碎混入。
- 2'. 2.50Y4/1 緑オリーブ灰色シルト質粘土 粘性。しまり強。地山土をブロック状に少量混入。炭化物を微量含む。小碎混入。
3. 50Y4/1 緑オリーブ灰色粉 植物遺体混入。ガラス片含む。
4. 10YR5/2 黄褐色粘土質シルト 粘性弱。しまり中。地山土をブロック状に少量混入。炭化物を微量含む。
5. 10YR5/3 にふい黄褐色粉 炭化物を微量混入。

SD141

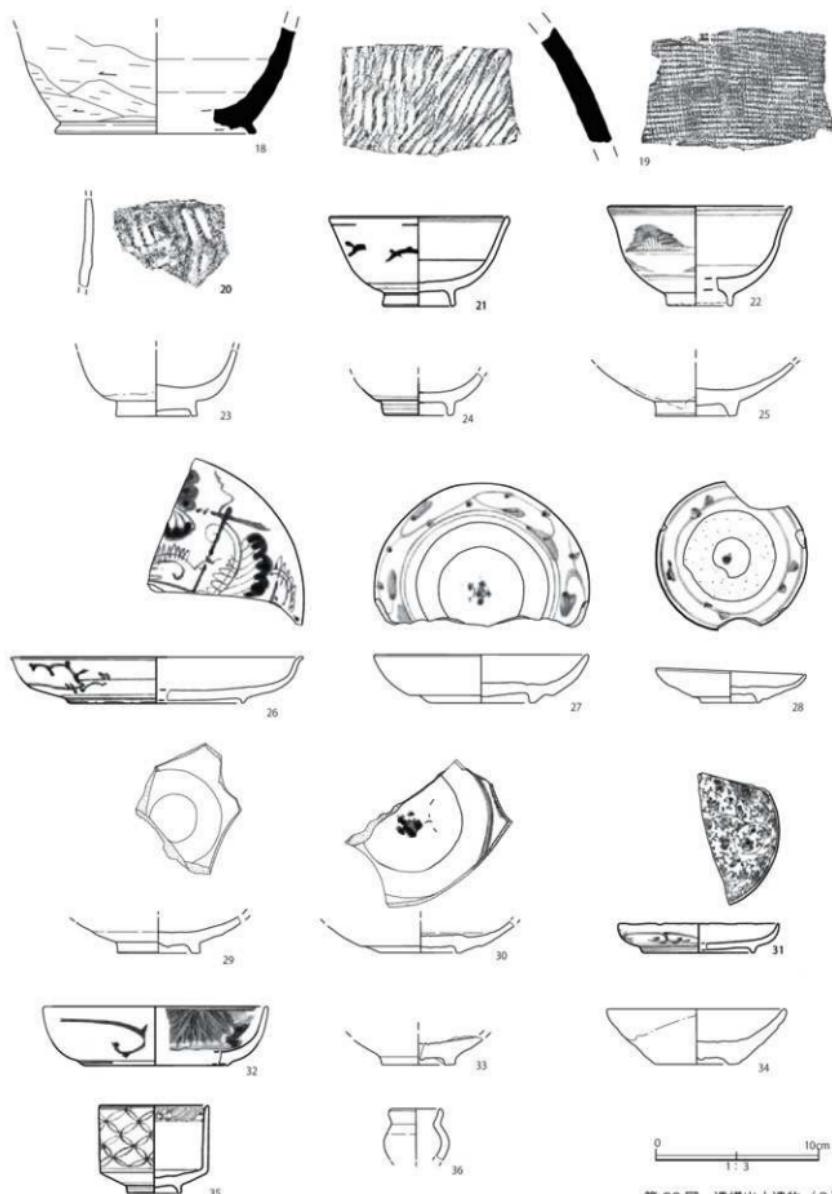
6. 2.50Y5/2 緑灰黄色砂質シルト 粘性。しまり弱。炭化物を微量含む。
- 6'. 2.50Y5/2 緑灰黄色粘土質シルト 粘性、しまり弱。炭化物を微量含む。
7. 2.50Y4/1 緑オリーブ灰色粘土質シルト 粘性中。しまり強。砂を層状に混入。植物遺体を微量混入。
- 7'. 2.50Y4/1 緑オリーブ灰色粘土質シルト 粘性中。しまり強。炭化物を多く含み。砂を層状に混入。植物遺体を微量混入。
8. 10YR5/1 細灰黄色シルト質粘土 粘性。しまり強。炭化物を多く含み。地山土をブロック状に少量混入。
9. 50Y4/1 緑オリーブ灰色粉 炭化物を微量含む。
10. 10YR5/3 黑褐色シルト質粘土 粘性。しまり強。地山土を小ブロックで少量含む。
11. 10YR4/6 暗色粉 植物遺体混入。



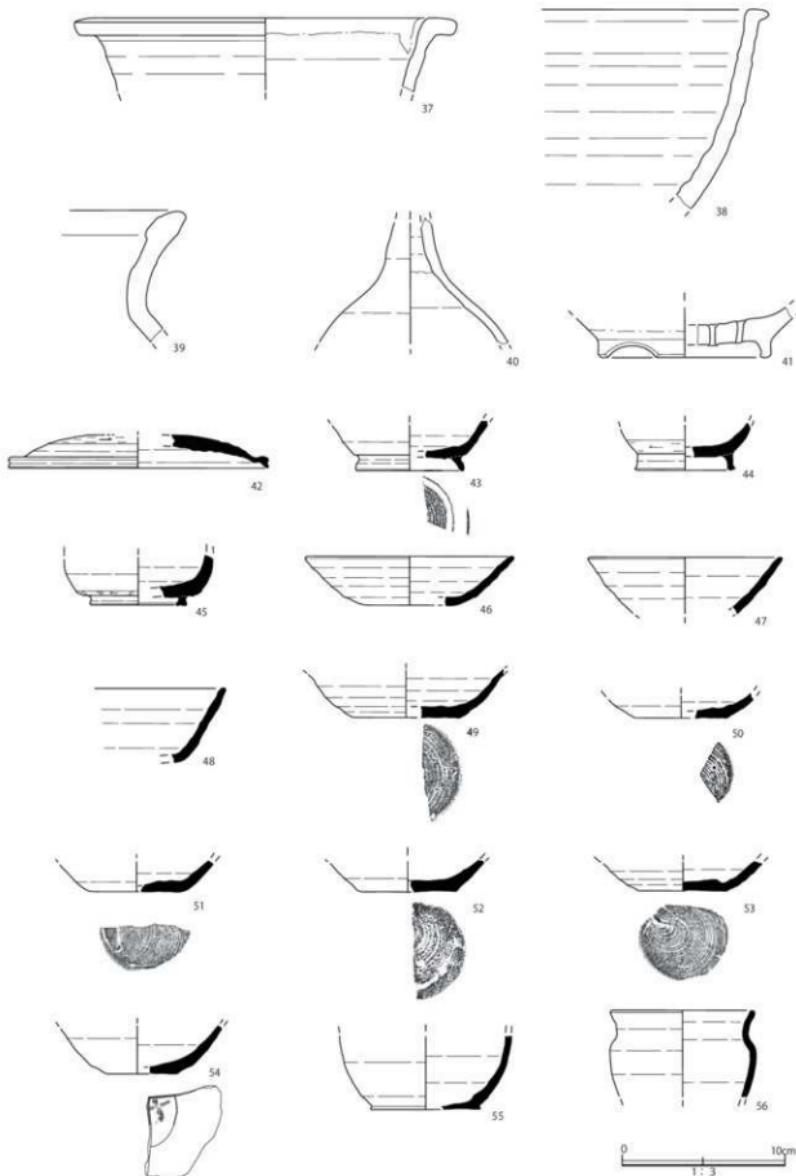
第24図 SD 140・141 水路跡 (3)



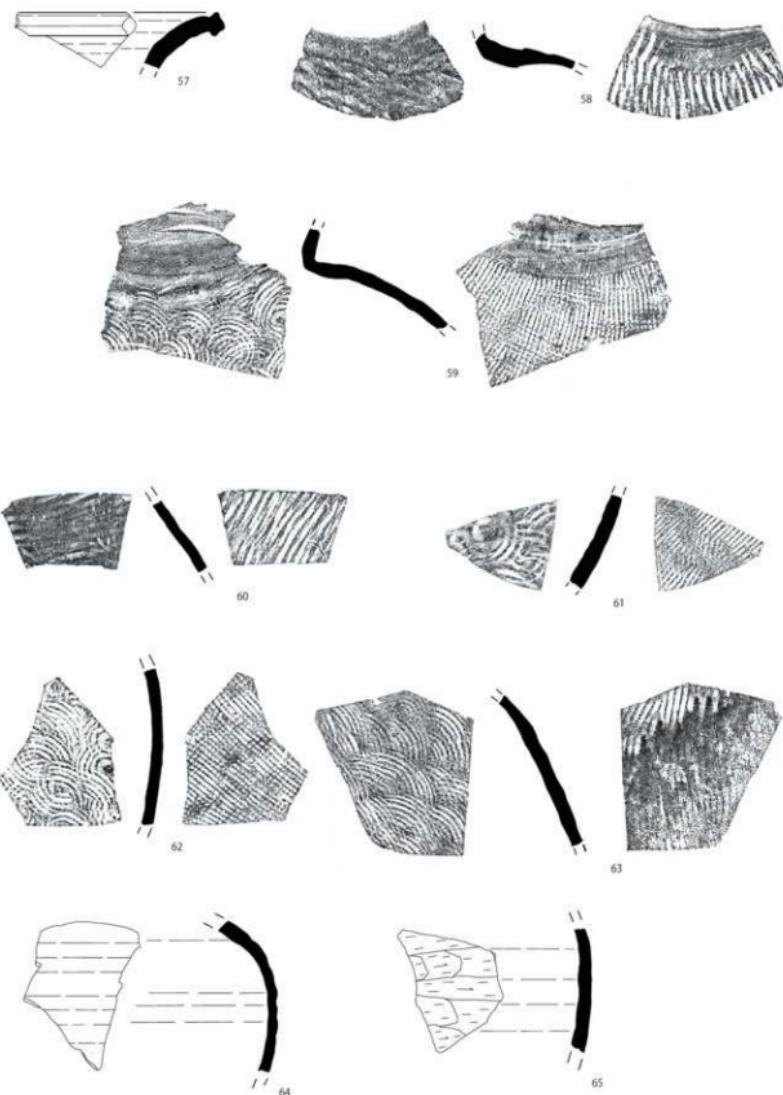
第25図 遺構出土遺物（1）



第26図 遺構出土遺物（2）

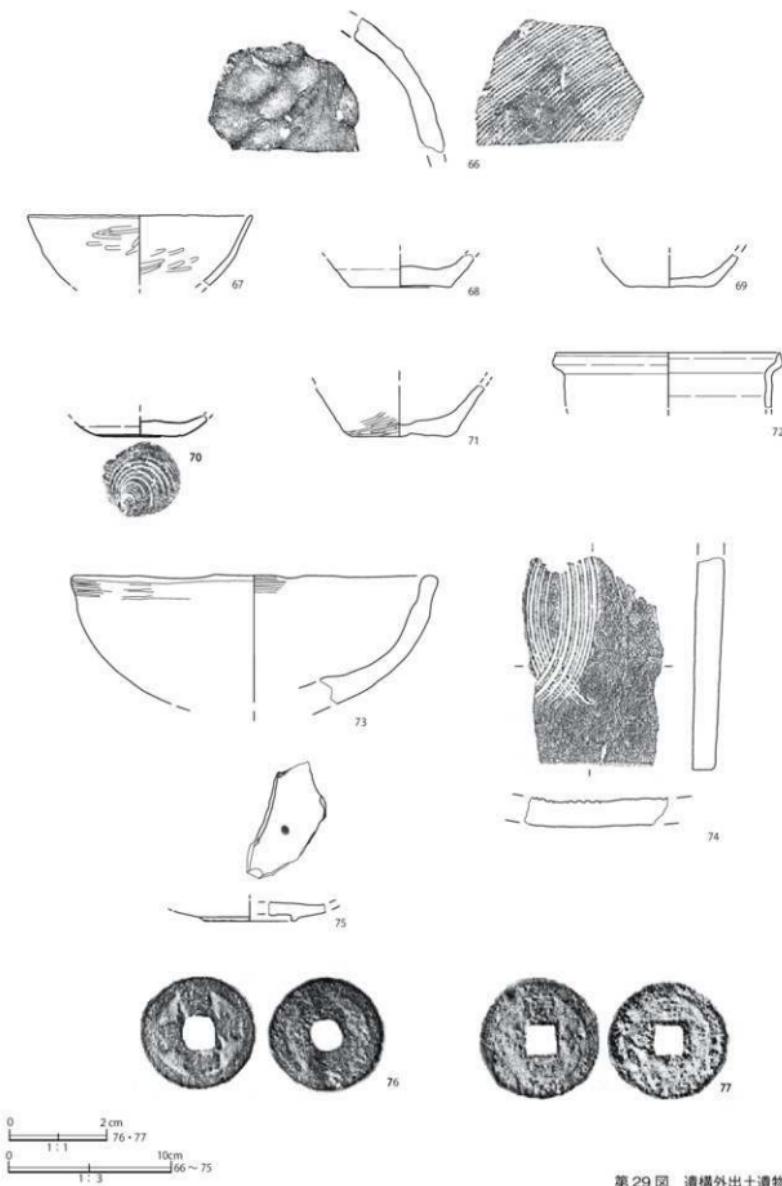


第27図 遺構出土遺物(3)、遺構外出土遺物(1)



0  
1 : 3  
10cm

第28図 遺構外出土遺物（2）



第29図 遺構外出土遺物（3）

表3 遺物觀察表

図版 番号	遺物 種別	器種	計測値 (mm)			調整・成形	釉薬	出土 地点	層位	備考
			口径	器高	底径					
1	須恵器	壺		(30)		ロクロナデ	ロクロナデ	SK13	F 2	
2	須恵器	壺	(126)	31	(76)	ロクロナデ	ロクロナデ	SK79	F1	
3	不明	不明	(15.5)			不明	不明	SK184	F	内面に有着物
4	須恵器	壺	(138)	(30)		ロクロナデ	ロクロナデ	SK284	F1	
5	黒色土器	壺		32		不明	ミガキ	SK289	F	内面黒色処理
6	土師器	壺	(15.5)	65	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	SK289	F	外面下部ヘラケズリ?
7	須恵器	壺	(132)	40	50	ロクロナデ	ロクロナデ	SK292	F	
8	須恵器	甕		(171)		叩き	當て具痕→カキメ	SK317	F1	
25	須恵器	台付碗	(156)	72	96	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	SP82	F1 脱土炒やや多い
10	須恵器	壺	(26)			ロクロナデ	ロクロナデ	—	SP83	Y
11	須恵器	壺	(123)	37.5	53	ロクロナデ	ロクロナデ	SD275	Y	
12	須恵器	壺		(13)	(55)	ロクロナデ	ロクロナデ	SD287	F	
13	須恵器	甕		(63)		叩き	當て具痕	SD305	F1	
14	陶磁器	小盃		51	36	ロクロナデ	ロクロナデ	SD305	F1 大宝寺焼?	
15	金銅製品	古錢						SD305	Y 寛永通宝	
16	須恵器	壺	(136)	3.9	6	ロクロナデ	ロクロナデ	SD307	F1	
17	土師器	壺		(18)	(50)	不明	不明	SD307	F1 内外面磨滅	
18	須恵器	甕		(65)	(125)	ロクロ→ツギ	ロクロナデ	SD141	F	
19	須恵器	甕		(70)		叩き	當て具痕	SD141	F 2	
20	土師器	甕?		(54)		叩き?	不明	SD141	F 2	
21	磁器	碗	(112)	55	46	ロクロナデ	ロクロナデ	削出高台	透明釉	SD141 F1 染付 在地?
22	磁器	碗	115	61	40	ロクロナデ	ロクロナデ	削出高台	透明釉	SD141 F1 染付 在地?
23	陶器	碗		(40.5)	50	ロクロナデ	ロクロナデ	削出高台	灰釉	SD141 F1 産地不明
24	磁器	碗		(26)	44	ロクロナデ	ロクロナデ	削出高台	透明釉	SD141 F 18~19世紀 波佐見焼
25	陶器	碗		(32.5)	50	ロクロナデ	ロクロナデ	削出高台	綠釉	SD141 F 18世紀 波佐見焼
26	磁器	皿	(182)	28	(110)	ロクロナデ	ロクロナデ	削出高台	透明釉	SD141 F 2 19世紀 肥前 染付
27	磁器	皿	(133)	29.5	66	ロクロナデ	ロクロナデ	削出高台	透明釉	SD141 F1 18世紀 波佐見 染付
28	磁器	皿	93	21	36	ロクロナデ	ロクロナデ	削出高台	透明釉	SD141 F1 19世紀 波佐見 染付
29	陶器	皿		22	52	ロクロナデ	ロクロナデ	削出高台	鐵釉	SD141 F1 18世紀 肥前(唐津)
30	磁器	皿		(19)	(51)	ロクロナデ	ロクロナデ	削出高台	透明釉	SD141 F1 19世紀 波佐見 染付
31	磁器	皿	(100)	18	(70)	ロクロナデ	ロクロナデ	削出高台	透明釉	SD141 F 17末~18世紀前半 肥前 染付
32	磁器	皿	(140)	36	90	ロクロナデ	ロクロナデ	削出高台	透明釉	SD141 F1 18世紀 肥前 染付
33	陶器	皿		(19)	46	ロクロナデ	ロクロナデ	削出高台	灰釉	SD141 F1 18世紀 肥前(唐津)
34	陶器	皿	(112)	34	52	ロクロナデ	ロクロナデ	削出高台	灰釉	SD141 F1 16世紀末~17世紀初 肥前(唐津)
35	磁器	碗	(68)	54	34	ロクロナデ	ロクロナデ	削出高台	透明釉	SD141 F1 18世紀 肥前 染付
36	陶器	小盃	(34)	31		ロクロナデ	ロクロナデ	鐵釉	SD141 F1 在地?	
37	陶器	鉢	(238)	(45)		ロクロナデ	ロクロナデ	鐵釉	SD141 F1 19世紀 大宝寺焼き	
38	陶器	鉢		122		ロクロナデ	ロクロナデ	鐵釉	SD141 F1 19世紀 大宝寺焼き	
39	陶器	甕		(80)		縦積み	縦積み	鐵釉	SD141 F 2 19世紀 肥前(唐津)	
40	陶器	他利		(78)		ロクロナデ	ロクロナデ	鐵釉	SD141 F1 19世紀 肥前(唐津)	
41	陶器	湯通し		30	107	ロクロナデ	ロクロナデ	穿孔	鐵釉	SD141 F1 大宝寺焼き
42	須恵器	蓋	162	20.5		ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	275-855	脱土炒やや多い
								275-860		
43	須恵器	高台付壺		(30)	(67)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	300-850	
44	須恵器	高台付壺		(28)	(60)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	290-835	
45	須恵器	小型甕		(30)	60	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	320-855	
46	須恵器	壺	(130)	30	(55)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	340-855	
47	須恵器	壺	(121)	(34)		ロクロナデ	ロクロナデ		370-820	
48	須恵器	壺		(46)		ロクロナデ	ロクロナデ		335-840	
49	須恵器	壺	(29)	(66)		ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	360-820	
50	須恵器	壺		(15)	(58)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	335-840	
51	須恵器	壺		(18.5)	(51)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	340-865	
52	須恵器	壺		(20)	(61)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	360-845	
53	須恵器	壺		(18)	(55)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	365-825	
54	須恵器	壺		(29.5)	(45)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	378-820	
55	須恵器	壺		(45)	(68)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	395-850	底部墨書き「□」
56	須恵器	小型甕	(90)	(53)		ロクロナデ	ロクロナデ		295-865	

図版	遺物	種別	器種	計測値 (mm)			調整・成形		釉薬	出土 地点	層位	備考
				口径	器高	底径	外面	内面				
	57	須恵器	壺	(35)			ロクロナデ	ロクロナデ		365-835		口縁部のみ残存
	58	須恵器	壺	(21)			叩き	当て具痕		360-840		
	59	須恵器	壺	(61)			叩き	当て具痕		315-840		
	60	須恵器	壺	(43)			叩き	当て具痕		300-835		
28	61	須恵器	壺	(37)			叩き	当て具痕		X0		
	62	須恵器	壺	(95)			叩き	当て具痕		355-840		
	63	須恵器	壺	(91)			叩き	当て具痕		355-825		
	64	須恵器	壺	(92)			ロクロナデ	ロクロナデ		315-835		
	65	須恵器	壺	(26)			ケズリ	ロクロナデ		300-830		
	66	陶器	壺	(78)			叩き	当て具痕		365-820		中世 珠洲焼
	67	土師器	壺	(43)			ミガキ	ミガキ		360-845		
	68	土師器	壺	(20)	63		ロクロナデ	ロクロナデ	削輪へケズリ	X0		
	69	土師器	壺	(20)	(53)		不明	不明	不明	330-845		内外面削減
	70	土師器	壺	(13)	47		ロクロナデ	ロクロナデ	削輪系切	355-850		
29	71	土師器	壺	(31)	(62)		ミガキ	不明	不明	360-840		
	72	土師器	壺				ロクロナデ	ロクロナデ		360-840		
	73	土師器	鉢	(79)			ナデ	ナデ		315-825		
	74	瓦	平瓦				描画			315-830		鶴ヶ岡城の瓦か
	75	磁器	皿	(12)	(57)		ロクロナデ	ロクロナデ	削出高台 透明釉	X0		17世紀初め 肥前
	76	金属製品	古銭							X0		寛永通宝
	77	金属製品	古銭							X0		

表4 木製品観察表

写真	番号	種別	器種	計測値 (mm)			本取り等	樹種	出土地点	備考
	78	木製品	建築部材	長 (700)	幅 (190)	厚 38	柾目	ヒノキ科 アスナロ属	S K365	表面を凹凸状に加工。
21	79	木製品	建築部材- 橋脚部	長 (479)	幅 76	厚 74	丸太材	ヒノキ科 アスナロ属	S D305 (355-820)	上部にはぞ穴、下部は柾状に加工。
	80	木製品	建築部材- 橋脚部	長 (522)	幅 82	厚 59	丸太材	ヒノキ科 アスナロ属	S D305 (355-820)	上部にはぞ穴、下部は柾状に加工。 一面を面取り加工
	81	木製品	建築部材- 橋脚部	長 630	幅 75	厚 60	角材	ヒノキ科 アスナロ属	S D305 (355-820)	両端にはぞ作。
	82	木製品	建築部材- 橋の部材	長 (517)	幅 (307)	厚 22	板目	マツ科ワガ属	S D305 (355-820)	
	83	木製品	不明-杭状	長 (227)	径 33		芯持ち材	マツ科ワガ属 (二葉松類)	S K222	先尖状（杭状に加工）。
22	84	木製品	不明-杭状	長 (397)	径 25		芯持ち材	ブナ科ブナ属	S K220	先尖状。表皮残存。
	85	木製品	不明-板状	長 575	幅 274	厚 10	板目	ヒノキ科 アスナロ属	S K92	U字状の切り込み1ヶ所。
	86	木製品	服飾品- 下駄	長 (145)	幅 (43)	厚 15	板目	スギ科スギ属 スギ	S D141 (315-825)	舟形下駄（裏面削り抜き）。
	87	木製品	容器-挽物			厚 4	縦木取り	ブナ科ブナ属	S K223	内外面赤津。

## 写真図版

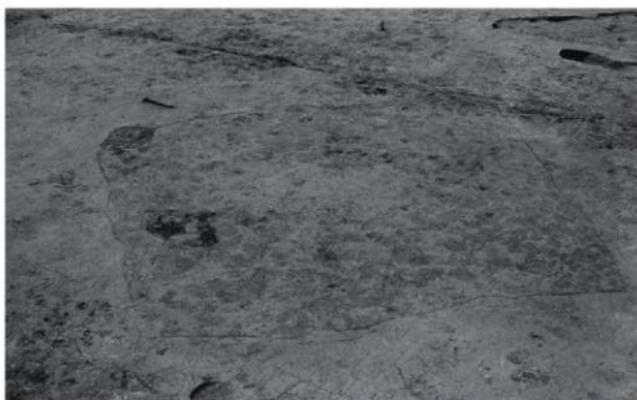
---



遺跡全景（東から）



遺跡全景（西から）



ST252 棟出状況（東から）



ST252 土層断面（東から）



ST252 完掘状況（東から）



SK92 土層断面（南から）



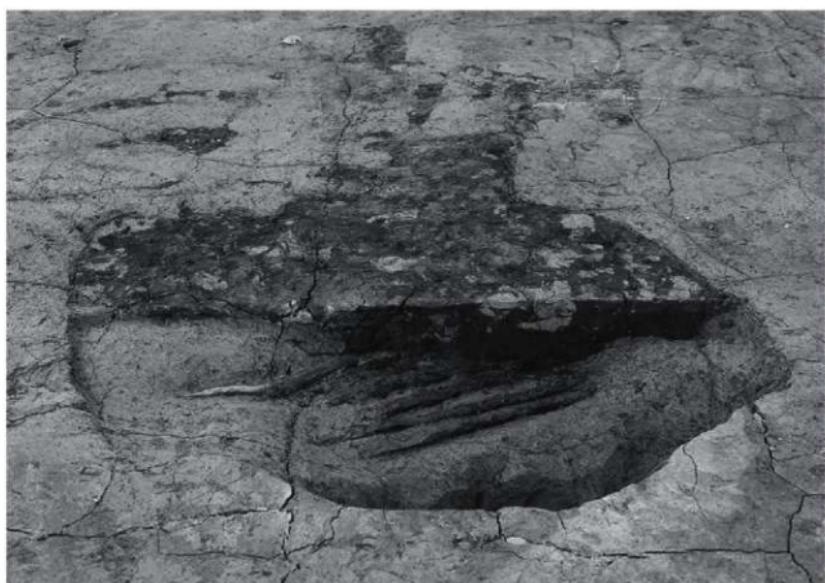
SK92 完振状況（北東から）



SK220・221 土層断面（南から）



SK220・221 完掘状況（東から）



SK222 土層断面（南西から）



SK222 完掘状況（南東から）



SK365 土層断面（西から）



SK365 完掘状況（南から）



SK13 土層断面（北東から）



SK51 土層断面（南から）



SK79-RP1 土出状況（南から）



SK227 土層断面（西から）



SK277 土層断面（北東から）



SK280 土層断面（南西から）



SP82-RP2 出土状況（南から）



SP349 土層断面（南から）



230～245-830～850G 完掘状況（西から）



250～255-835～845G 完掘状況（東から）



230～255-855～865G 完掘状況（北西から）



265～285-830～850G 完掘状況（北西から）



255～285-830～855G 完掘状況（西から）



265～285-830～845G 完掘状況（北西から）



350～360-830～845G 完掘状況（北から）



SD275c'-c 土層断面（北西から）



SD275-RP3 土出状況（東から）



SD307 土層断面（西から）



SD307-RP4 出土状況（北西から）



SD305 完掘状況（西から）



SD305 土層断面 b - b' (西から)



SD305 土層断面 c' - c (東から)



350 ~ 370 - 810 ~ 845G 完掘全景（上空から）



SD140 西端トレンチ土層断面（東から）



SD140 土層断面 a-a' (東から)



SD140 土層断面 b-b' (東から)



SD141 土層断面c'-c (西から)



SD141 全景 (西から)



須恵器杯・蓋



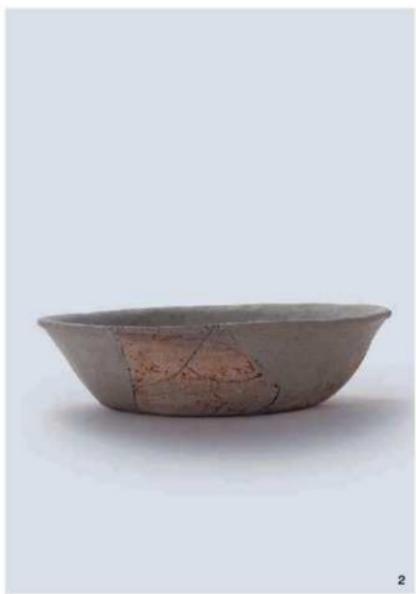
SD141 出土磁器



SD141 出土遺物



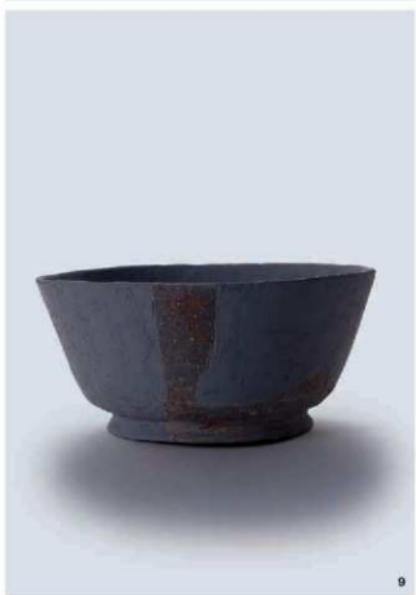
須惠器壺・甕



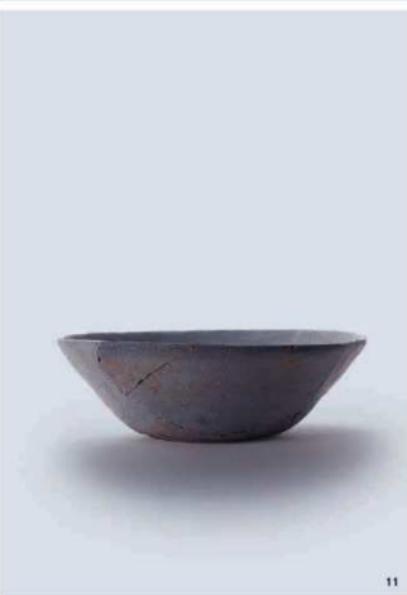
2



7



9



11

SK79・292、SP82、SD275 出土須恵器



16



43



42



56

SD307、遺構外出土須恵器



SK13・284、SD141、遺構外出土須恵器



10



12



46



47



48



49

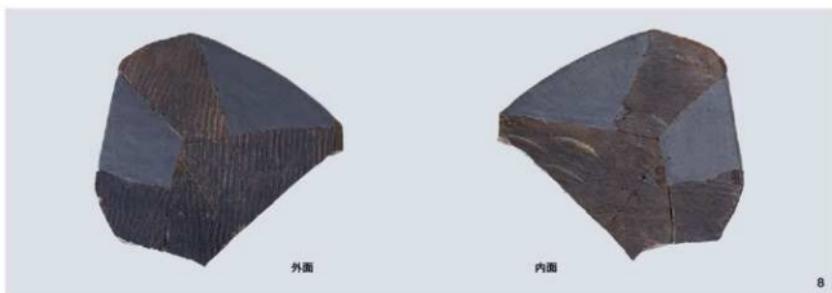


50



51

SP82、SD287、遺構外出土須恵器



SK289・317、遺構外出土須惠器・土師器



20



67



70



71



72



17



68

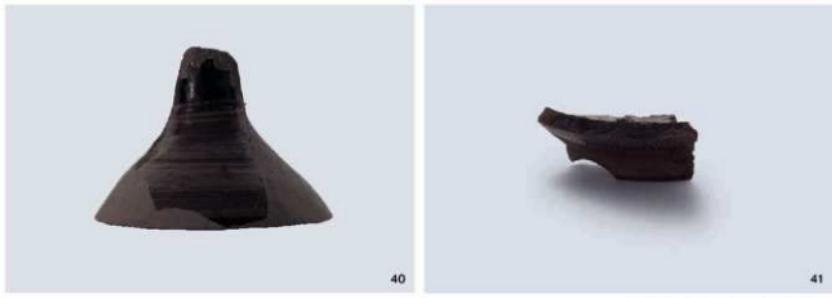
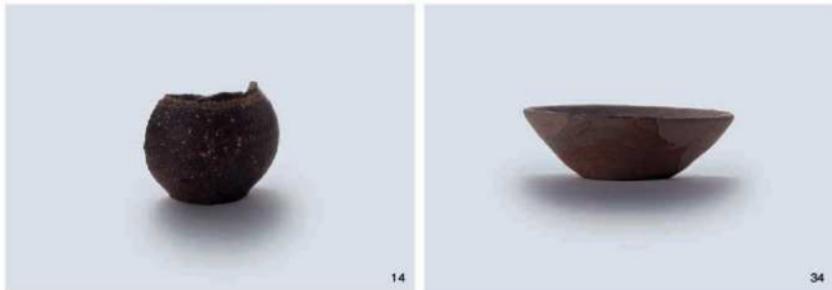
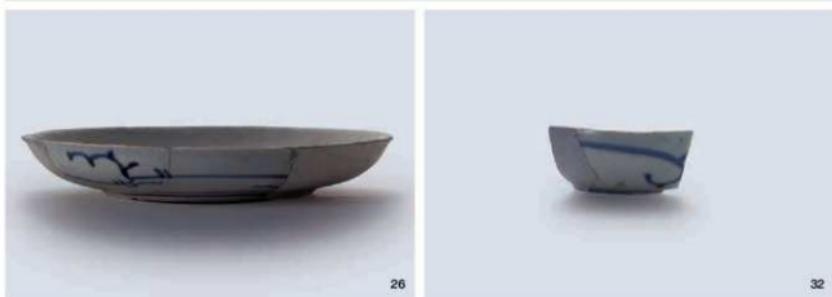


69

SD307、SD141、遺構外出土土器



66



SD305・141、造構外出土遺物



36



73



75



74



3



15 76 77



78



79

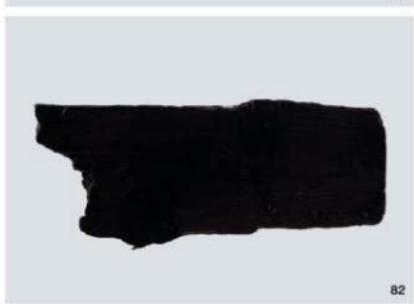
SK365、SD141・305、遺構外出土遺物



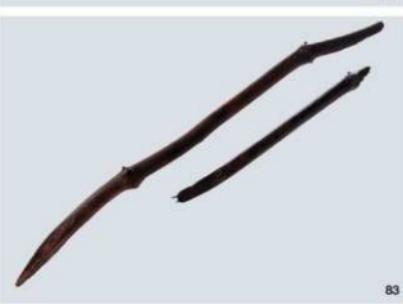
80



81



82



83



84



85

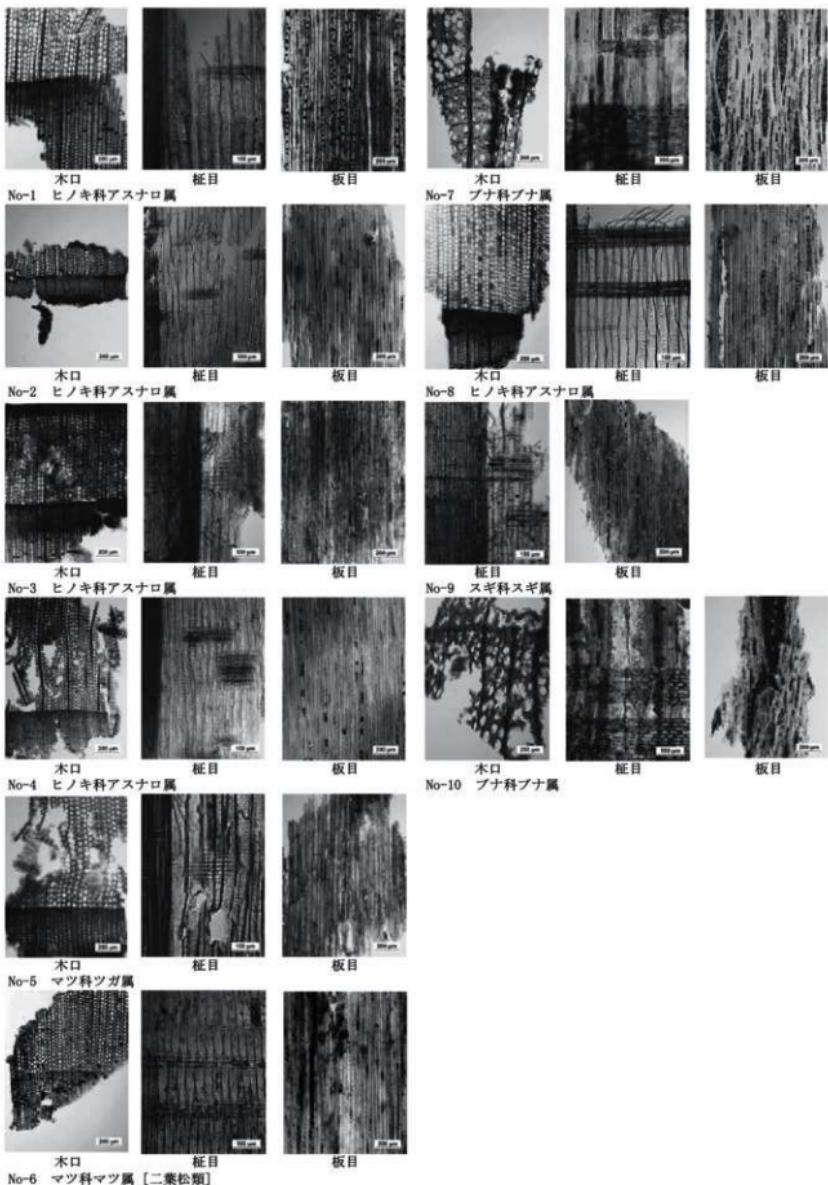


86



87

SK92・220・222・365、SD141・305 出土木製品



木材の顯微鏡写真

## 報告書抄録

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 191 集

## 南口 A 遺跡発掘調査報告書

2010 年 3 月 31 日 発行

発行 財團法人 山形県埋蔵文化財センター  
〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目 15 番 1 号  
電話 023-672-5301  
印刷 中央印刷株式会社  
〒990-0051 山形県山形市銅町一丁目 1 番 5 号  
電話 023-631-5533